「学生による授業評価」に基づく

授業報告書

2024 年度

聖心女子大学

目次

第１章　学生による授業評価の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

第２章　専任教員による授業報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

第３章　学科・専攻による授業報告書

英語文化コミュニケーション学科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

日本語日本文学科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58

史学科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61

人間関係学科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

国際交流学科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64

哲学科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66

教育学科［教育学専攻・初等教育学専攻］・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67

心理学科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70

第４章　聖心女子大学グッドティーチャー賞の推薦・・・・・・・・・・・・・・・・・73

参考資料　2024 年度 授業に関する調査 Google フォーム
　　　　　2024 年度 専任教員授業報告書 Google フォーム

第１章　学生による授業評価の概要

１．実施対象科目

2024 年度の学生による授業評価は、2023 年度に続き、Google フォームを用いたオンライン回答形式にて実施した。

2024 年度に授業評価が行われたのは 379 科目であった。内訳は専任教員による授業が 124 科目（前期 63 科目、後期 61 科目）で、非常勤による授業が 255 科目（前期 148 科目、後期 107 科目）であった。学生の有効回答者数は延べ 8,282 名となるが、実施科目のうち、教員の指示なく回答したと思われる科目については集計の対象外とした。

コロナ禍前の 2019 年度は全体で 475 科目行われたのに対し、2021 年度は 241 科目と半減したが、2022 年度は 380 科目と数字は改善され、コロナ前に戻ったとは言えないものの本年度はその水準を保っている。ただし、専任教員による授業評価数は 2019 年度の 78 科目から 2021 年度の 93 科目、2022 年度の 110 科目、2023 年度の 123 科目と増加傾向であり、2024 年度は 124 科目と昨年度と同様の安定した水準を保っている。非常勤の授業評価実施数は 2022 年度から研究室を通しての告知などを行ったところ大きく改善したが、2023 年度は頭打ちとなり、2024 年度も 255 科目と昨年度から伸びが認められない。オンライン回答以前の 2019 年度は 475 科目であったことを考えると、非常勤の授業評価の実施率は半減しており、別な方法を検討する必要がある。

２．実施方法

学生による授業評価は Google フォームで実施した。学生は教員の指示に従い、各自 Google にアクセスして回答する。回答は無記名で、時間は 10 分～15 分程度であった。

（１）専任教員実施方法

授業評価は原則、Google フォーム上に回答する形式で行われた。回答率向上のため評価予定の科目についてできるだけ授業時間内に回答するよう周知する。授業時間内に実施が難しい場合は「明日の 17 時まで」など期日を指定して対応する。教務課で集計を行い、各授業の単純集計と自由記述部分を担当教員にフィードバックする。教員はそのデータを自身で管理し年度末に授業報告書を作成する。尚、リアクションペーパー・教員個人で作成したアンケートなどで実施の場合は、教務課を通さず教員自身で対応する。

（２）非常勤講師実施方法

実施予定科目を選択式で実施（※非常勤は選択式のみ）することを学生に指示し、回答率向上のためできるだけ授業時間内に回答するよう周知する。授業時間内に実施が難しい場合は「明日の 17 時まで」など期日を指定して対応する。教務課で集計を行い、調査結果データ及び自由記述部分は後日郵送する。

（３）前年度からの変更点などについて

2021 度は Sophie（教務管理システム）を用いて専任教員と非常勤講師に分けて実施について周知したが、回答数が増えず、全体で 241 科目、6,273 名の有効回答数であった。そこで、2022 年度からは実施についてのお知らせを Sophie に掲示するだけでなく、研究室を通じて紙媒体で配付をしている。また、

実施についてのお知らせに QR コードを記載するようにした。
専任の先生には学内メール、非常勤の先生には Sophie に「メールあり」で調査期間中 2 度ほど実施について掲示した。2022 年度からは授業評価の告知を Sophie に掲示するだけでなく、研究室を通じて紙媒体で配付した。また、前年同様、専任の先生には学内メールを送信、非常勤の先生には Sophie に「メールあり」で調査期間中 2 度ほど Sophie に実施について掲示した。その結果、上記で示した通り、専任教員の授業評価実施数は 22 年度の 110 科目から本年度の 123 科目へと増加し、2024 年度も同様の水準を保っている。一方、非常勤講師の評価実施数は 22 年度からの伸びは認められず、紙媒体で評価を実施していた時期の数字に戻る兆しは認められない。授業評価に参加した学生数については 22 年度の 8,023 名から 23 年度は 9,004 名へと 1000 名ほどの増加が認められたが、24 年度は評価を実施した授業数に大きな変化がないにもかかわらず 8,282 名と減少している。

３．評価内容
Google フォームでの質問内容は以下の通りである。

Q1. この授業への出席率はどのくらいでしたか。
Q2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。（本やインターネットで調べるなども含む）
Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。
Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。
Q5. シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。
Q6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。
Q7. 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った。
Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。
Q9. 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった。

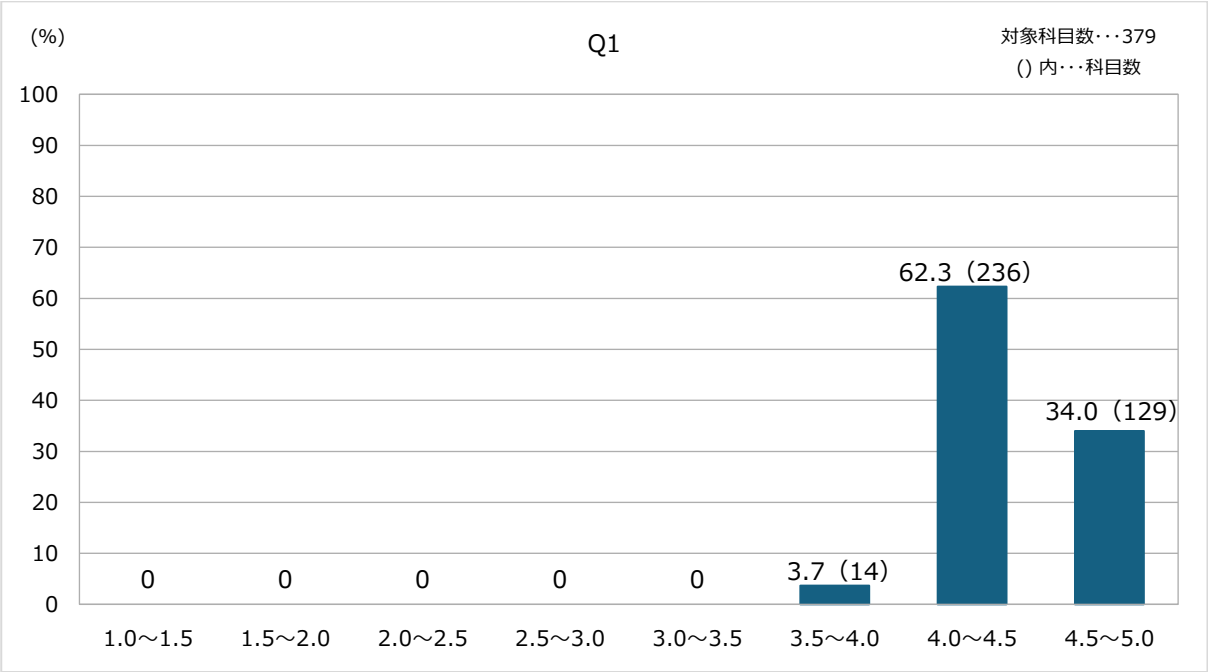
各設問への回答選択肢は次の通りである。
Q1 については、「すべて出席した、1～2 度欠席したがほとんど出席した、3 分の 2 程度出席した、3 分の 1 程度出席した、ほとんど出席しなかった」の 5 段階で、Q2 については「2 時間以上、1～2 時間、30 分～1 時間、30 分以下、0 分」の 5 段階で回答を求めた。その他の質問については、「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの 5 段階で評価してもらった。

４．各設問への回答結果

各授業について学生の回答の平均値を算出し、その平均値の分布を以下の図で示している。以下、順に見ていく。

（１）この授業への出席率はどのくらいでしたか

全体として「ほとんど出席以上」を意味する 4.0 以上の比率が 9 割 5 分を超え、出席状況は良好である。ただし、前回の 2023 年度では「4.5～5.0」の比率が 58%であったが、2024 年度は 62%とやや上昇する一方、「4.5～5.0」が 38%から 34%へと低下し、わずかな変化ではあるが、欠席をした経験のある学生が増えている。尚、コロナ禍の 2021 年度は「4.5～5.0」の比率が 9 割であったことを考えると、学業以外の活動が活性化していることも一つの理由と考えられる。今後の推移にも注目していきたい。



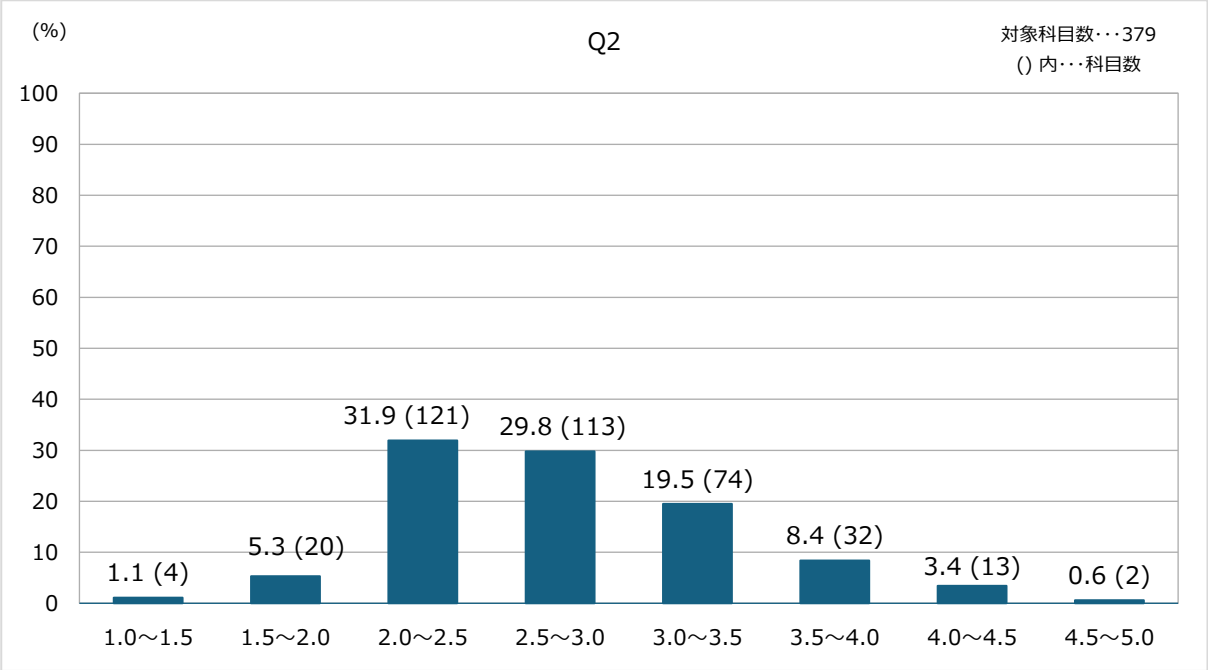
Q1. この授業への出席率はどのくらいでしたか。

5. すべて出席した　　4. 1～2 度欠席したがほとんど出席した　　3. ３分の２程度出席した

2. ３分の１程度出席した　　1. ほとんど出席しなかった

（２）この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなども含む)

昨年度と同様、「週 30 分以下」から「30 分～1 時間」程度の予習、復習をした授業が全体の 6 割を占めている。予習・復習時間の減少傾向は 2021 年度から継続してたが、「3.0～3.5」以上の層、すなわち、週 30 分以上の合計は、2023 年度の 29%から本年度は 32%とわずかに上昇しており、下げ止まる兆しも認められる。引き続き、2025 年度のデータを注目したい。



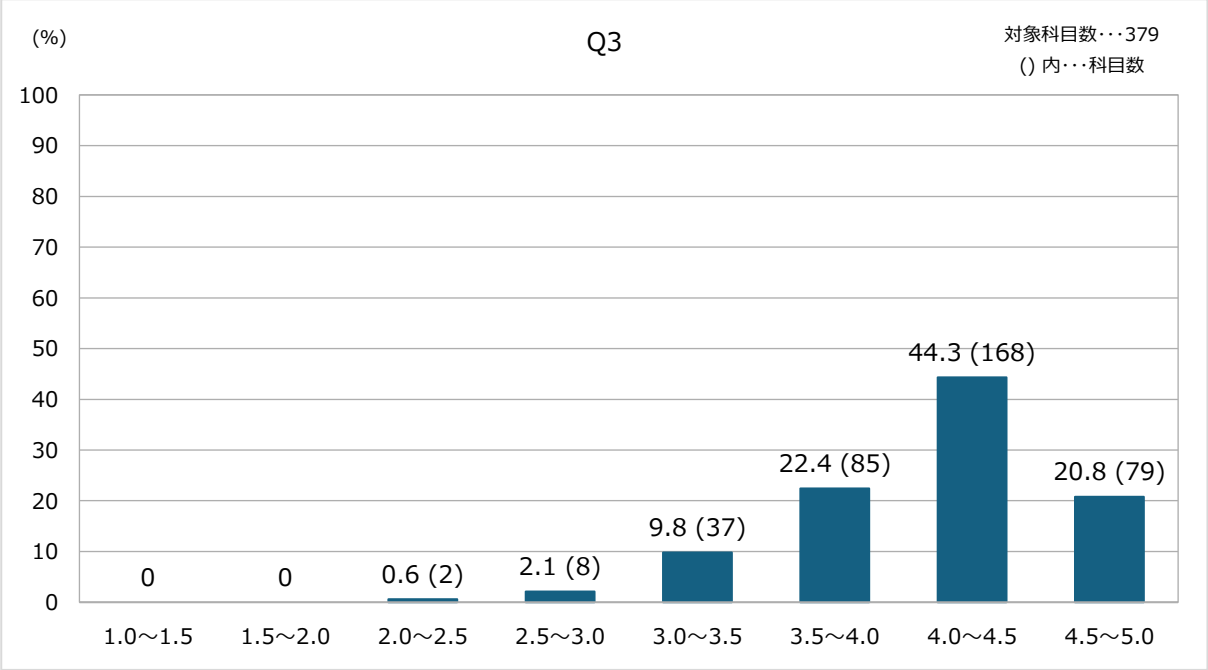
Q2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなども含む)

5. 週 2 時間以上　　4. 週 1～ 2 時間　　3. 週 30 分～ 1 時間　　2. 週 30 分以下

1. 週 0 分

（3）受講前からこの授業の内容に興味・関心があった

「受講前からこの授業の内容に興味・関心があった」という項目に当該授業がどの程度あてはまるかを尋ね、受講前の授業への学生の関心度とした。平均が 4.0 以上、すなわち、「ある程度当てはまる」から「よく当てはまる」と評価された授業が全体の 7 割強と多かった。2021 年度以降から大きな変化は見られない。



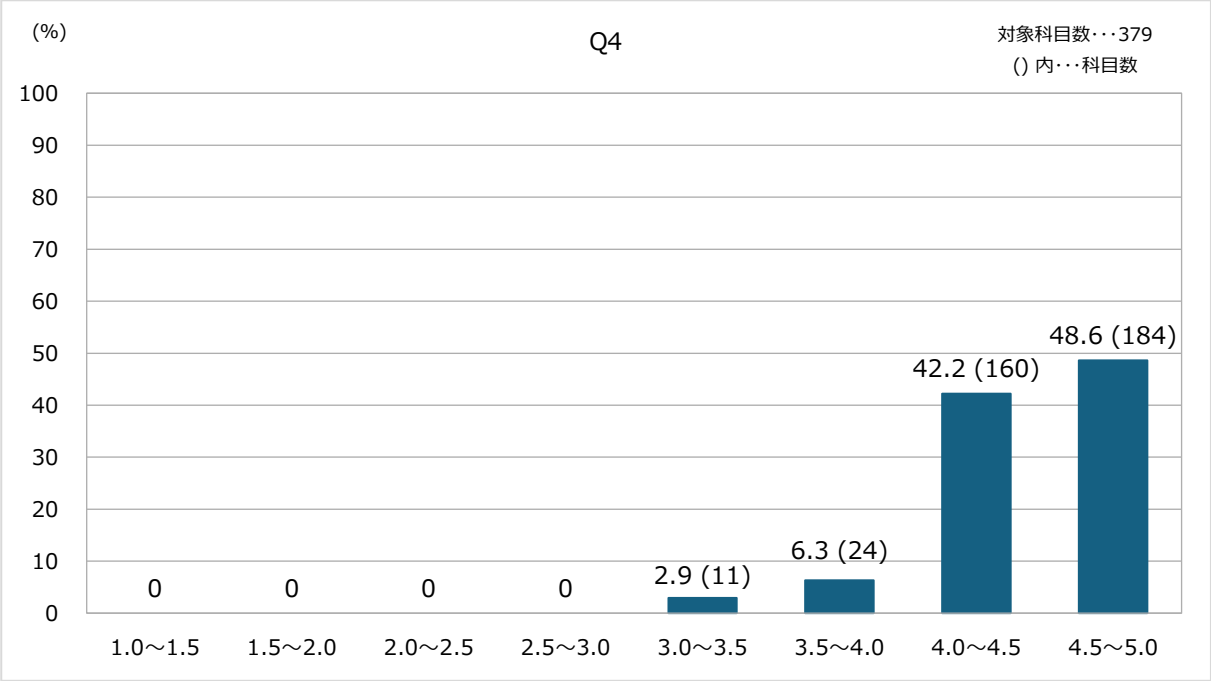
Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。

5. よくあてはまる　4. ある程度あてはまる　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　1. まったくあてはまらない

（4）総合的にみて、この授業に満足した

「総合的にみて、この授業に満足した」との項目に当てはまる程度を尋ね、授業への満足度とした。学生の評定の平均が 4.0 以上、すなわち、「よくあてはまる」と「ある程度あてはまる」の間に学生の平均がある授業が 9 割弱と多かった。2023 年度と比較すると「3.5～4.0」が 10%から 6%と低下する一方、「4.0~4.5」が 42%と若干上昇し、改善の方向性が認められる。



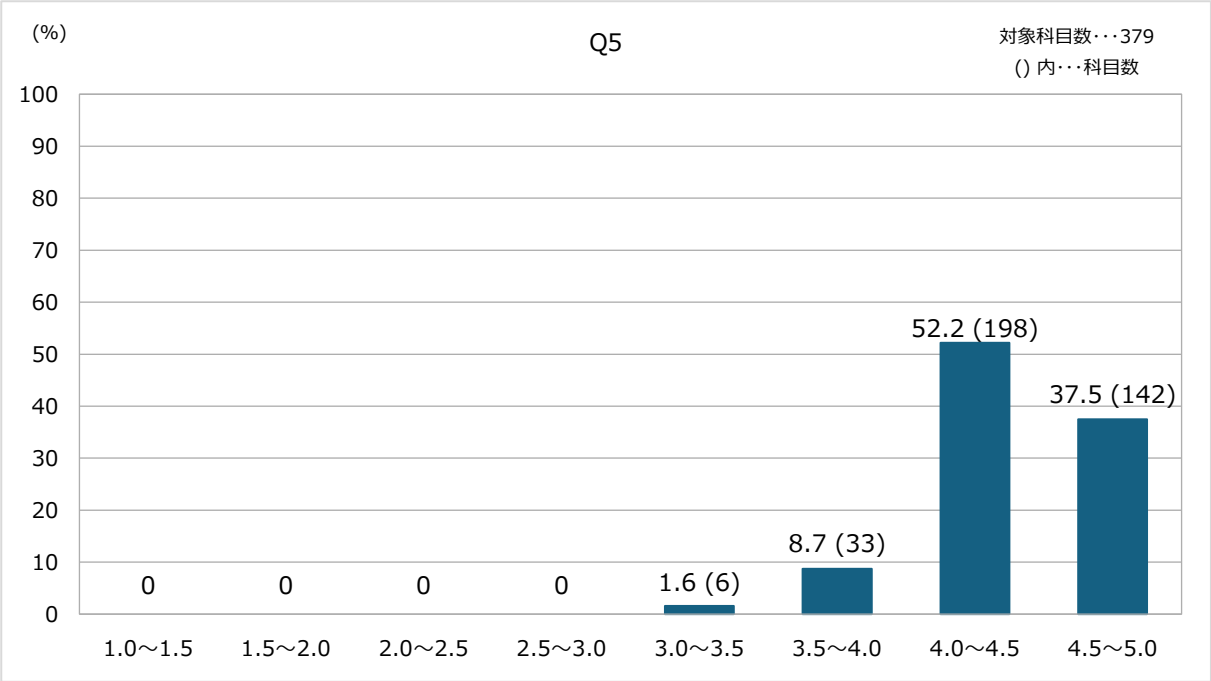
Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

（5）シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

「シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った」の項目への当てはまる程度を尋ね、シラバスの記載内容への評価とした。学生の評価が、4.0 以上、つまり「ある程度当てはまる」以上と評価された授業が全体の 9 割弱と多く、学生はシラバスに概ね満足している。4.0 以上の授業の比率は昨年度に比べると 87%から 89%にわずかに高くなっているがほとんど変化はない。



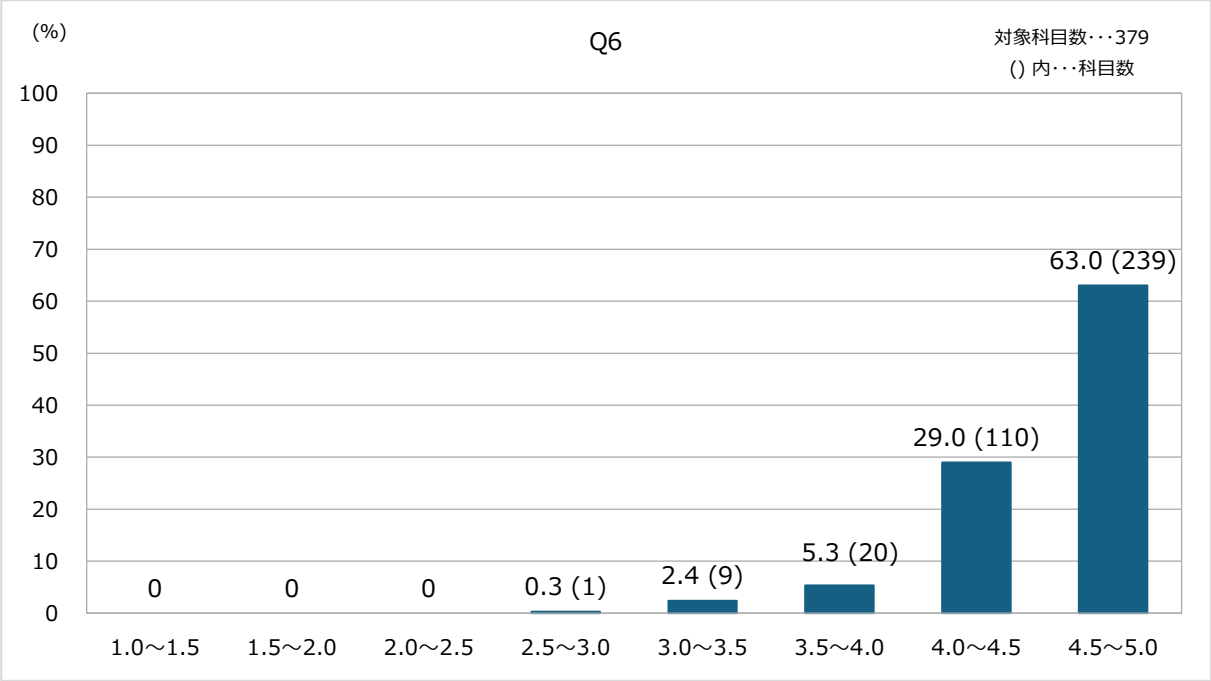
Q5. シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

5. よくあてはまい　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

（６）教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった

「教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった」の項目への当てはまる程度を尋ね、教員の説明への評価とした。学生の平均の評価値が「4.5～５.0」の授業が全体の６割を占め、「4.0～4.5」を合わせると９割弱を占めている。全体に評価の高い授業が多い。2023 年度に比べると、4.0 以上の授業の比率は 87%から 92%と若干の上昇が認められる。



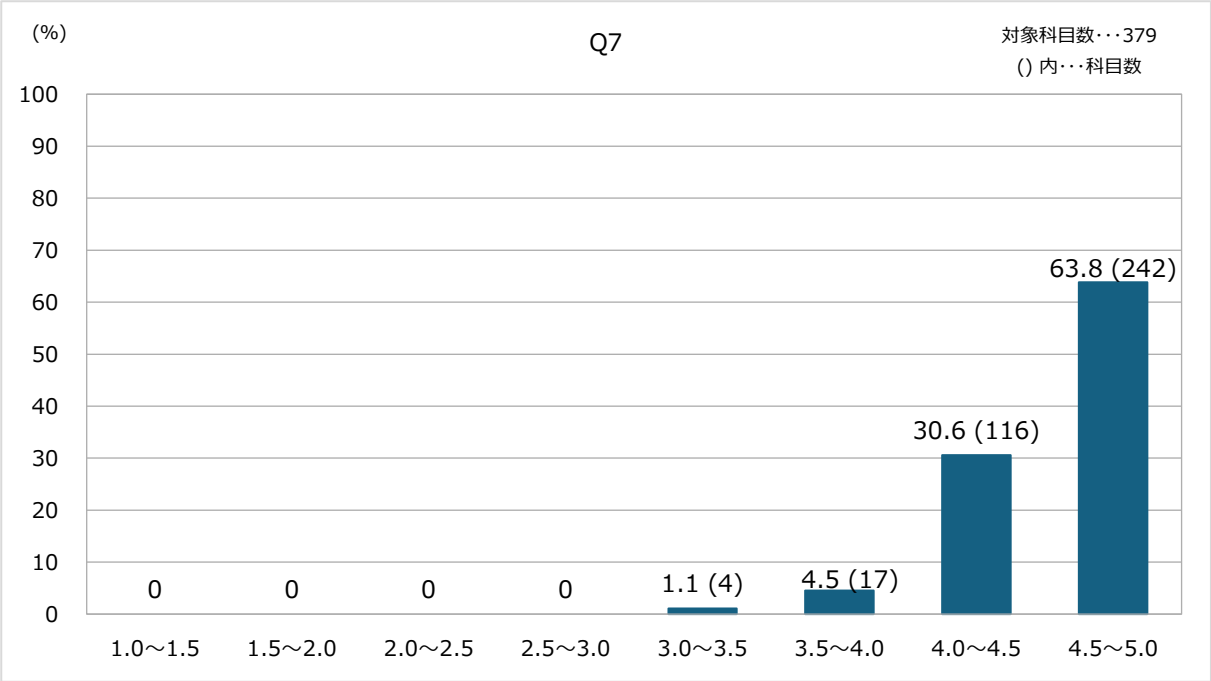
Q6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

（７）授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った

「授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った」の項目にあてはまる程度を尋ねた。学生の平均値が「4.5～5.0」の授業が全体の 64%と高く、「4.0~5.0」を合わせると 9 割を超えている。ただし、昨年度と大きな変化は認められない。



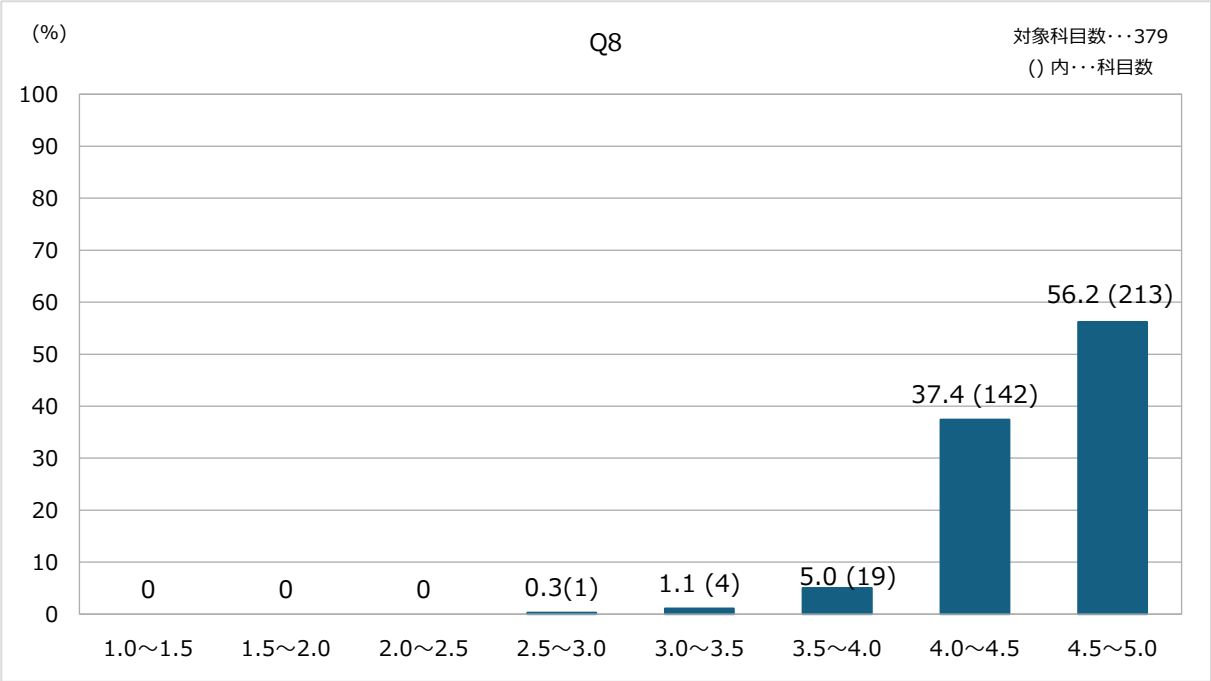
Q7. 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った。

5. よくあてはまる　4. ある程度あてはまる　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　1. まったくあてはまらない

（８）毎回の授業内容の分量や速度は適切だった

「毎回の授業内容の分量や速度は適切だった」の項目に当てはまる程度を尋ねたところ、平均値が 4.5 以上、「ある程度当てはまる」から「当てはまる」と評価された授業が、全体の 56%であり、平均値で 4 以上の授業も 9 割を占めている。この数字は昨年度と大きな変化はなく、学生は授業の分量や速度に満足しているようである。



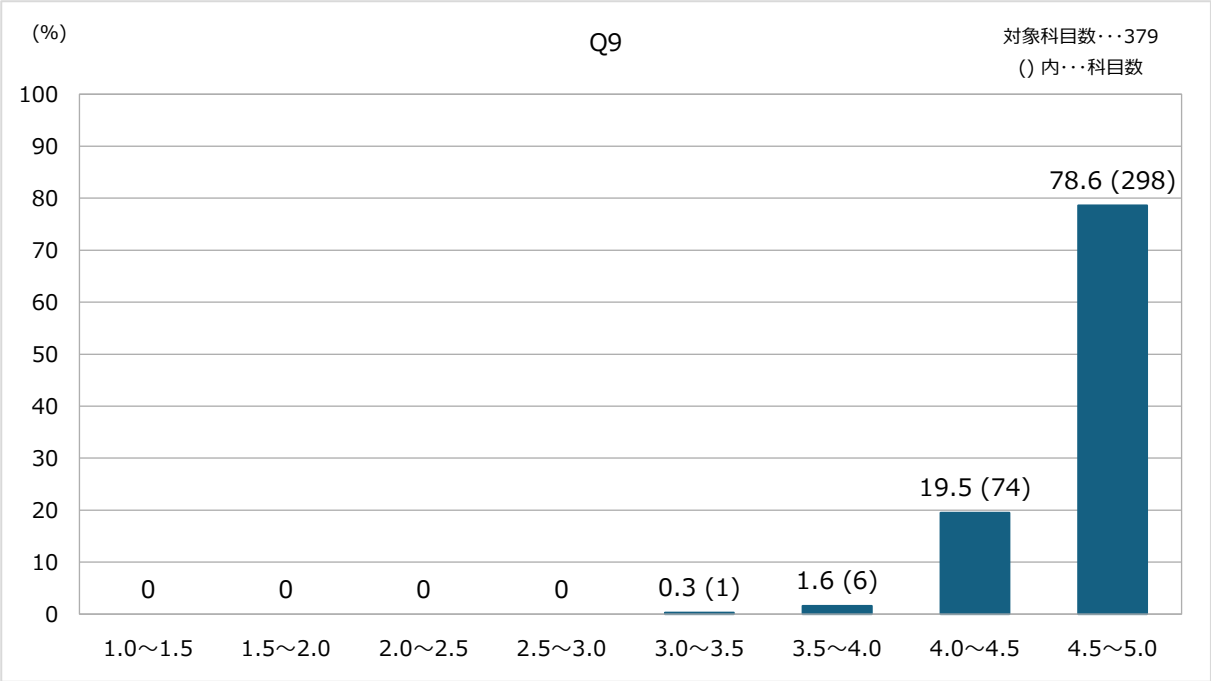
Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

（９）教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった

「教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった」に当てはまる程度は「4.5 から 5 .0」と高い授業が全体の 79%を占めて多かった。ただし、2022 年度の 82%に対し、昨年は 76%への低下が見られたが、本年度は若干戻している。今後の推移を見守りたい。



Q9. 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

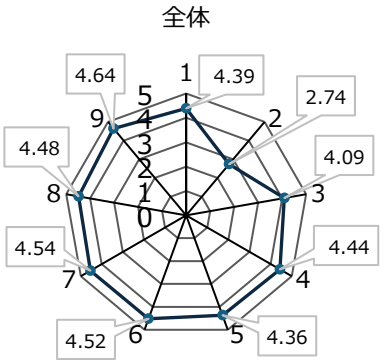
(10)全体の傾向と学科別、全学共通科目別の比較

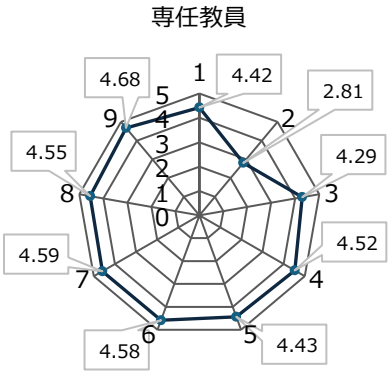
以上、見てきたように授業全体として、総合的な満足度が「ある程度満足」以上の授業が 9 割を超えるなど良好な状態を継続している。これを学科や全学共通科目における領域別に集計し、レーダーチャートにしたものが下記の図である。 1 ~ 9 の数値は今まで述べてきた評価項目を指し、吹き出しはそれぞれの属性の授業の平均評価値を示している。

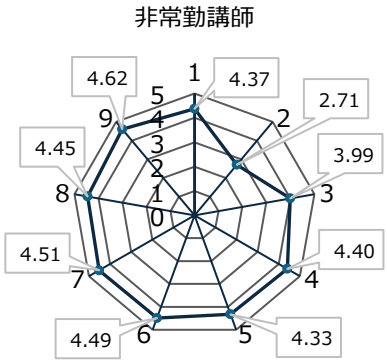
総合的な満足度に注目すると、全体として平均が 4.44 と高いが「教育」「英文」「哲学」「日文」では 4.5 を超えて高い。また、領域別では「基礎課演習」が 4.7 と飛びぬけて高い値を示している。また、「総合現代教養」や「ウエルネス・身体活動」も 4.6 程度と満足度が高い。その一方で、「キリスト教学」は 3.9 に留まり、その他の語学の授業もやや満足度は低めである。

また、チャートの形を見ると、全体に 4.0 を超えて大きな丸型の形になっているが、 2 の項目、すなわち、予習・復習の時間だけが 2 点台に留まっている。平均して 30 分程度の予習復習に留まる授業が多いことを示している。学科別では「英文」をはじめ「心理」「国際交流」で予習・復習時間が長く、「史学」「教育」「人間関係」で短い傾向が見られる。全学共通科目では語学系で予習・復習時間が長く、「キリスト教学」や「ウエルネス・身体活動」で短くなっている。

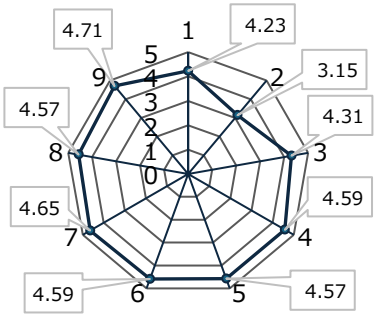
ただし、これらの傾向は評価の対象がすべての授業ではない点に注意する必要がある。教員が授業改善の目的から運営上、課題のある授業に絞って対象を選択しているなどの意図が働いた結果である可能性もある。



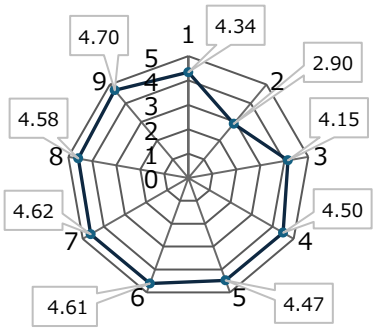




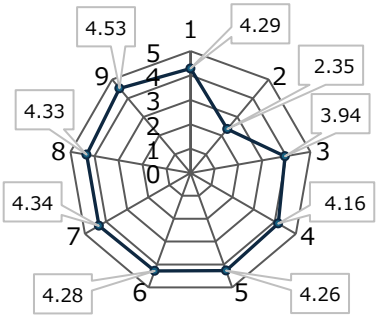
英語文化コミュニケーション



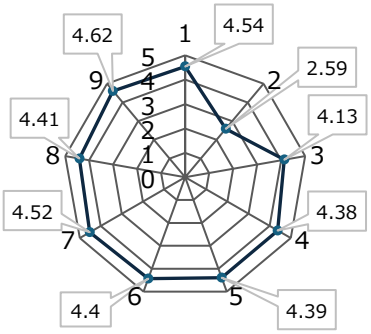
日本語日本文学



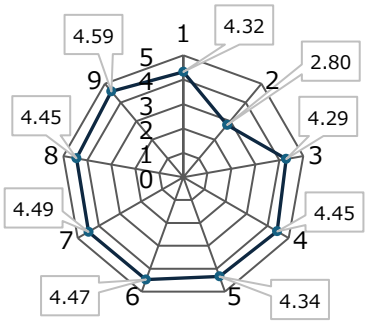
史学



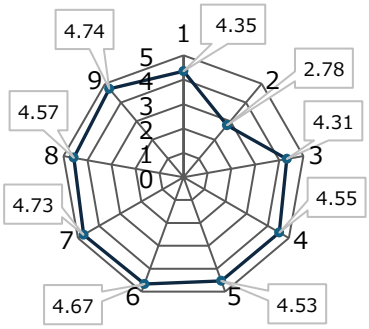
人間関係



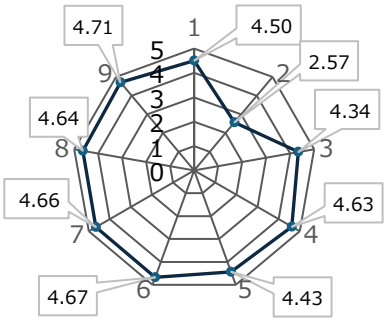
国際交流



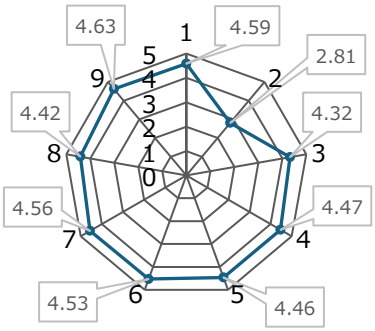
哲学



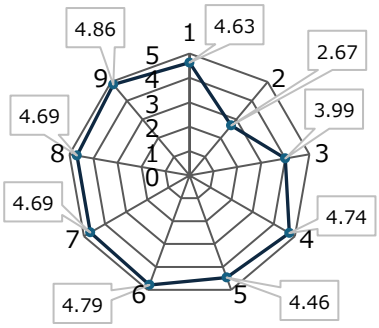
教育学



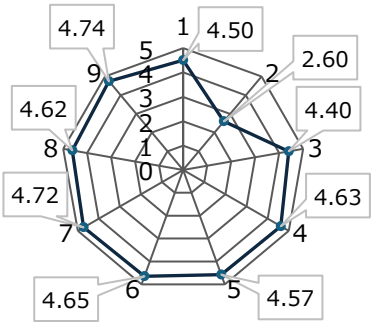
心理学



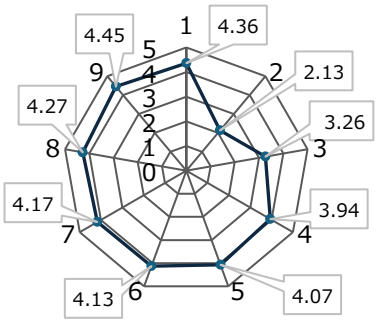
基礎課程演習



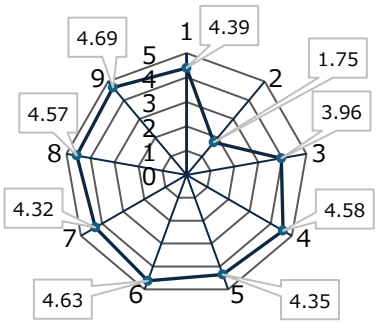
総合現代教養



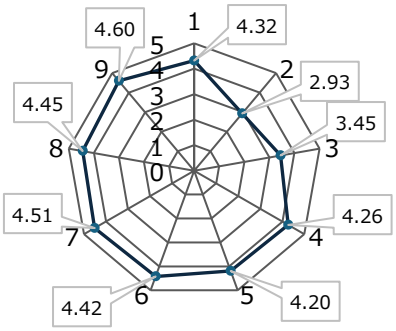
キリスト教学



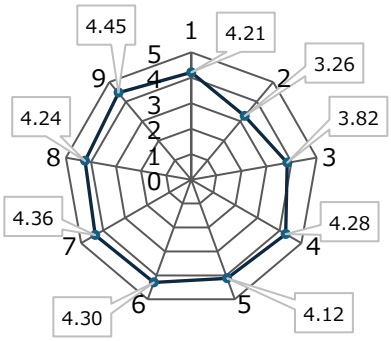
ウェルネス・身体活動（実技）



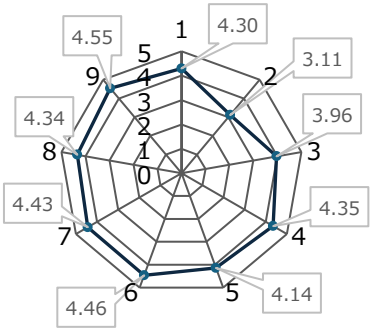
英文専攻以外第一外国語（リーディング・オラル）



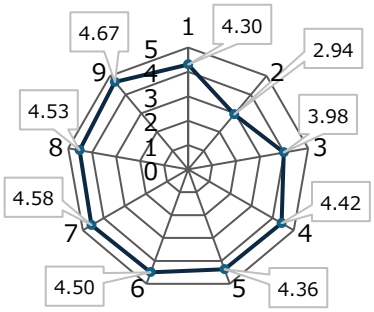
Academic Reading ・Academic Writing



1年第二外国語



2年第二外国語

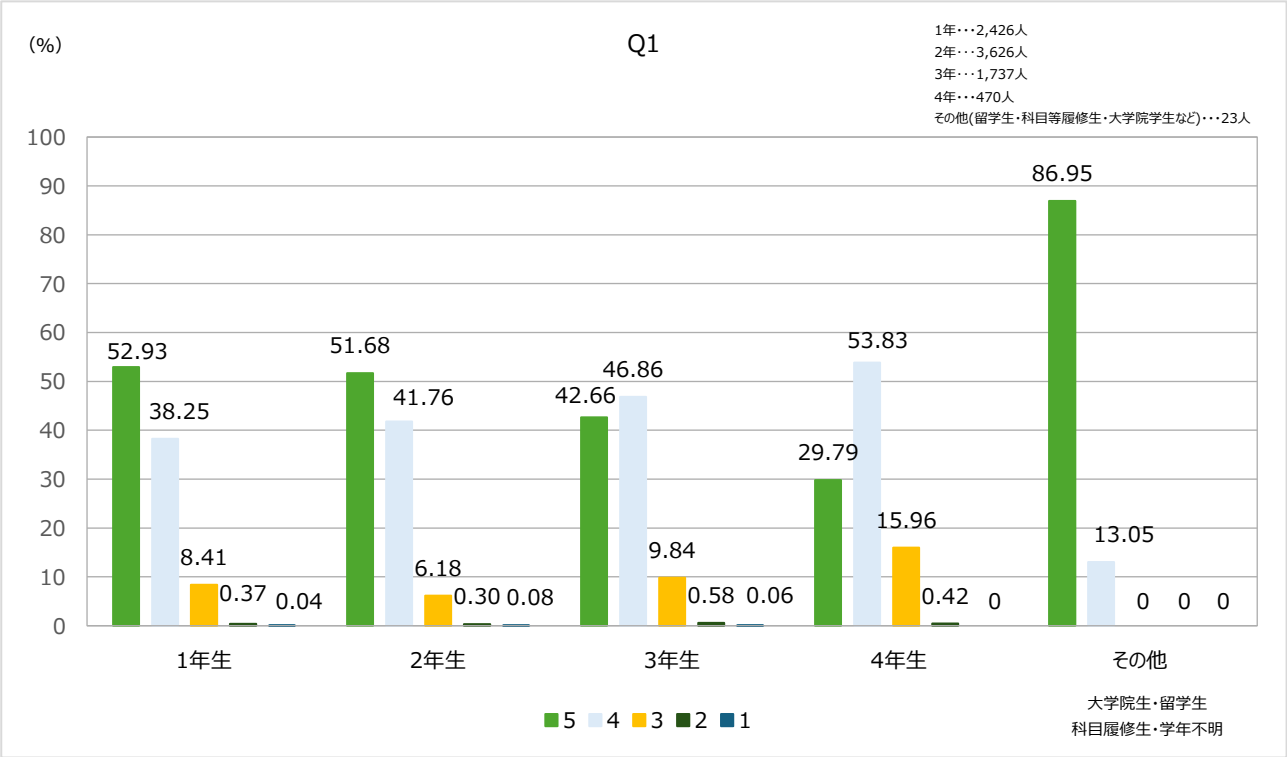


５．学年別の選択肢平均回答比率

以下、各設問に関して、学年別の結果を図示する。学年間での主な違いをピックアップすると次のようになる。授業への出席は学年の進行とともに低くなる傾向が認められる。注目すべきは３年生の経年変化で、「すべて出席」は昨年度の 52%から本年度は 43%へと大幅な低下が認められる。就職活動の時期が早まったことによる影響が考えられるが、今後の変化に注意していきたい。

また、従来と同様、授業への満足感に関する諸指標は「1 年次」においてやや低く、学年進行に伴って改善していく様子が認められる。学年進行に伴って改善傾向が認められることは望ましい結果であるが、1 年次に低い評価が継続しているという点に関しては、基礎課程でのカリキュラムや教育活動のあり方について、改めて検証してみる必要がある。

（１）出席状況

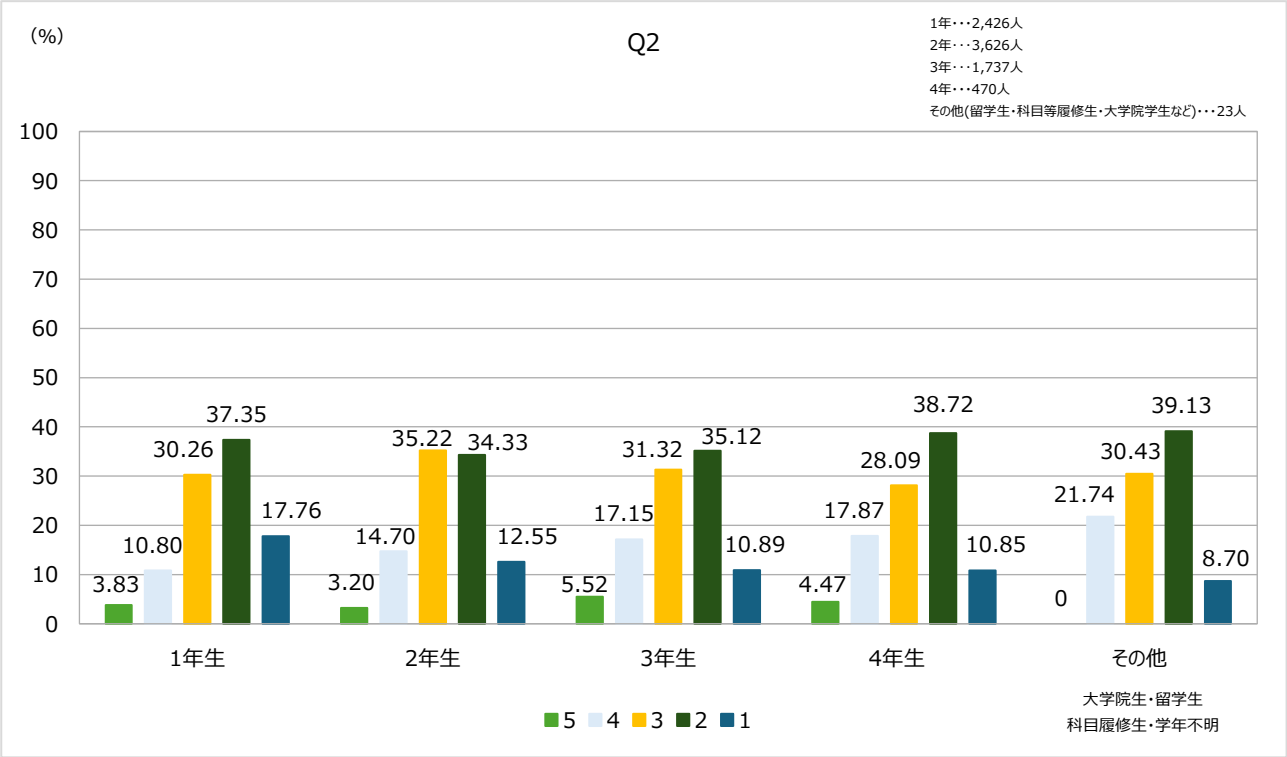


Q1. この授業への出席率はどのくらいでしたか。

5. すべて出席した　　4. 1～2 度欠席したがほとんど出席した　　3. ３分の２程度出席した

2. ３分の１程度出席した　　1. ほとんど出席しなかった

（２）予習・復習時間

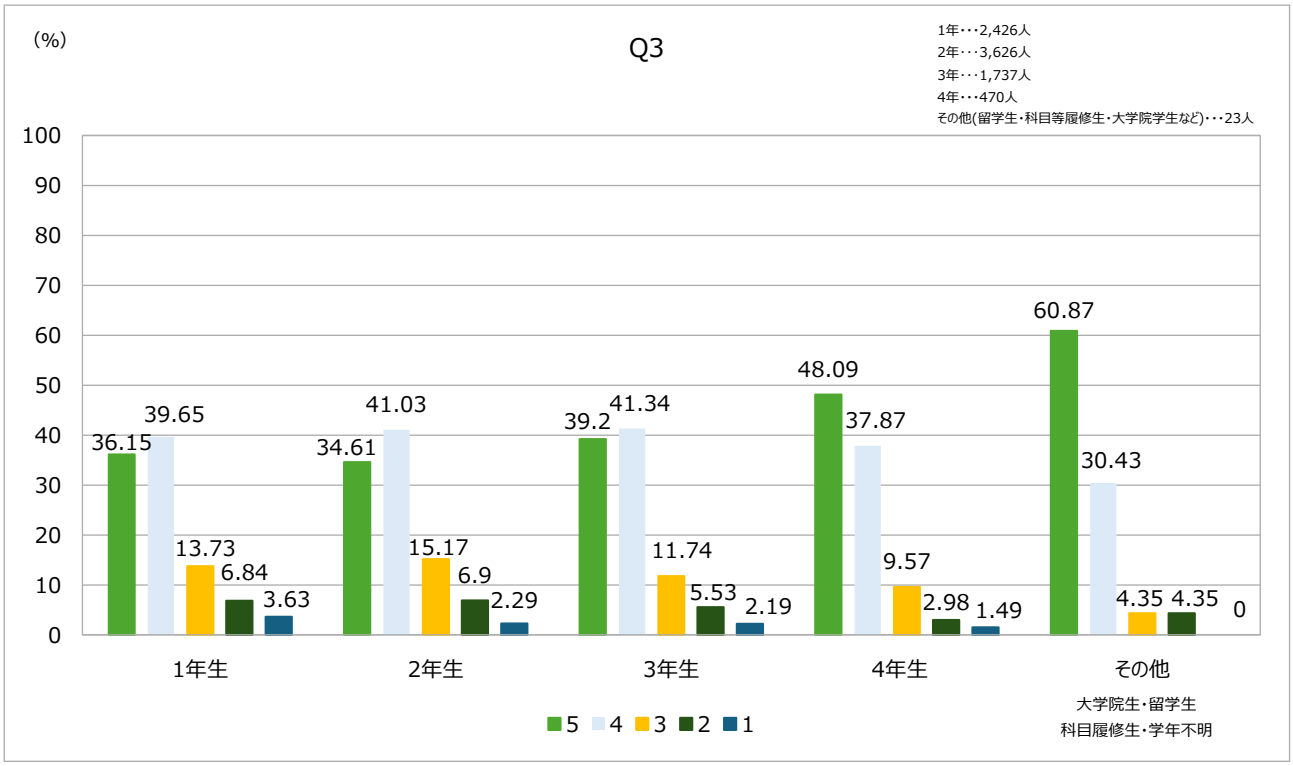


Q2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなども含む)

5. 週２時間以上　　4. 週 1～２時間　　3. 週 30 分～１時間　　2. 週 30 分以下

1. 週０分

（３）受講前の授業への興味・関心

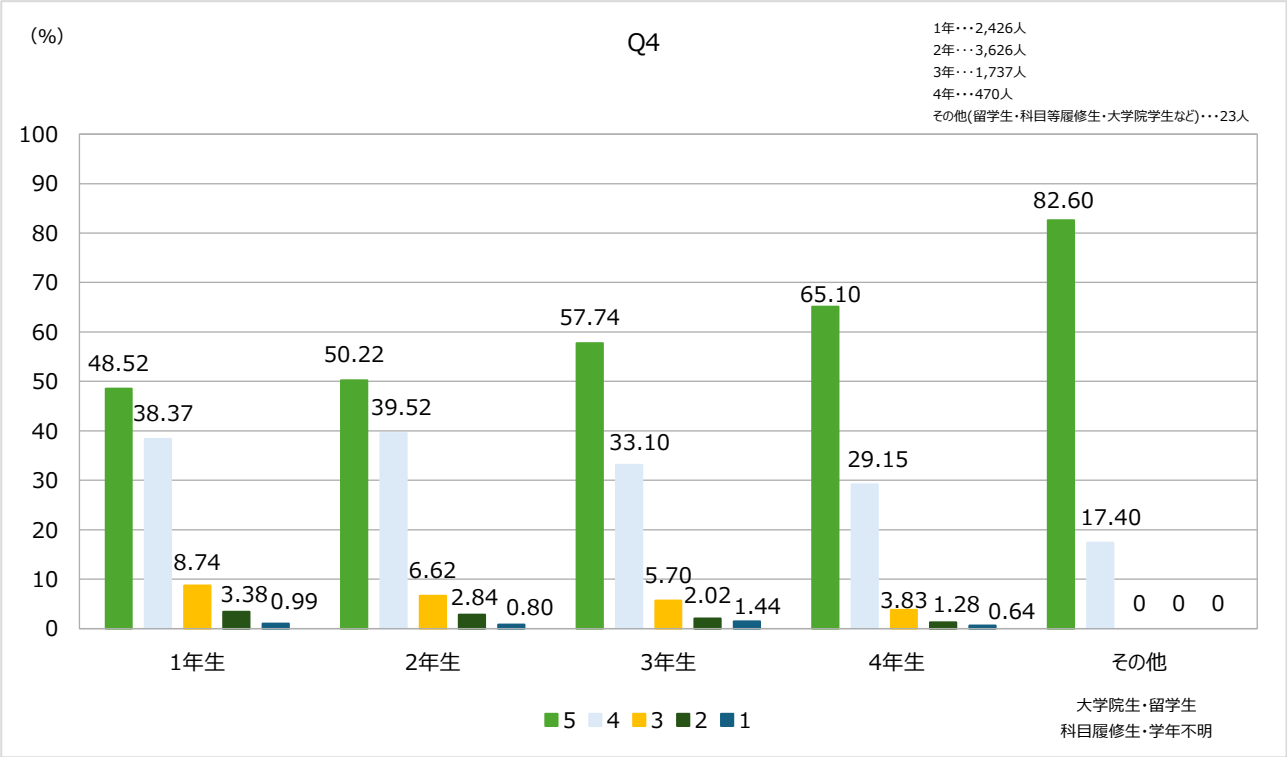


Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

（４）授業への総合的満足度

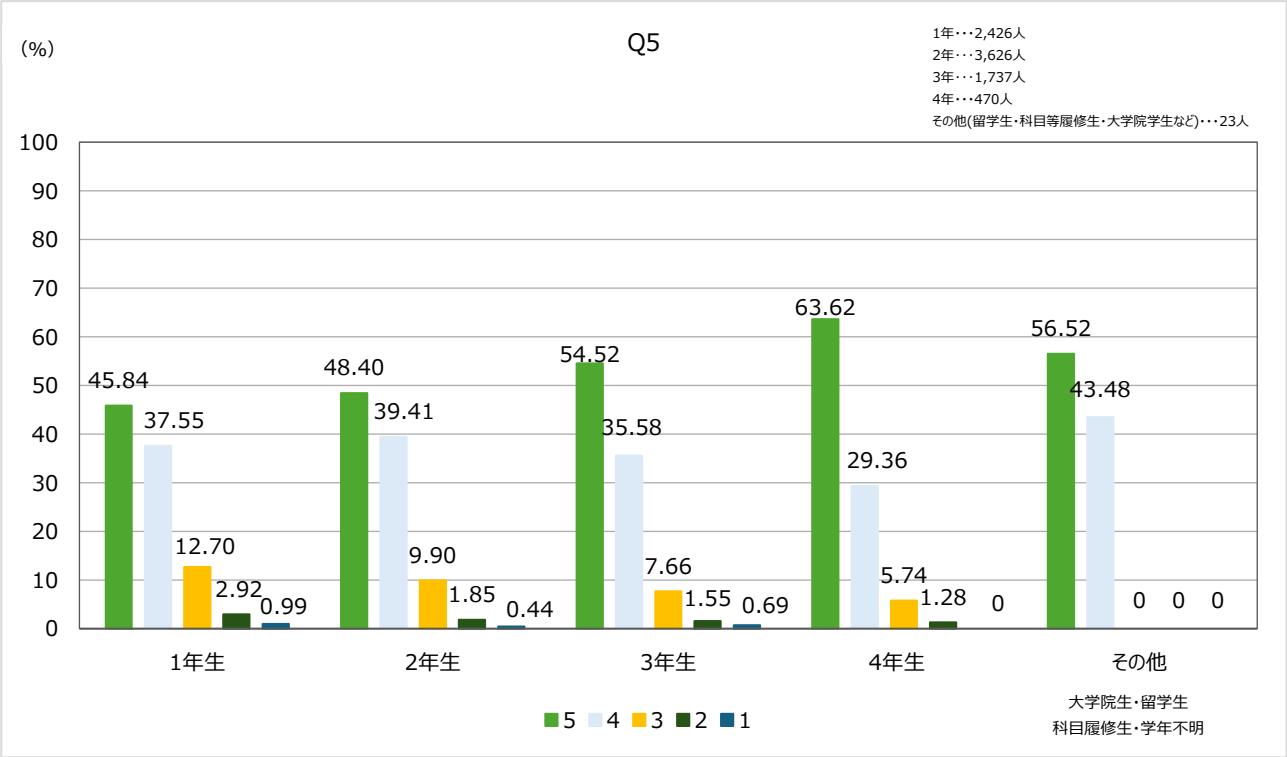


Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

（５）シラバスの記載内容の

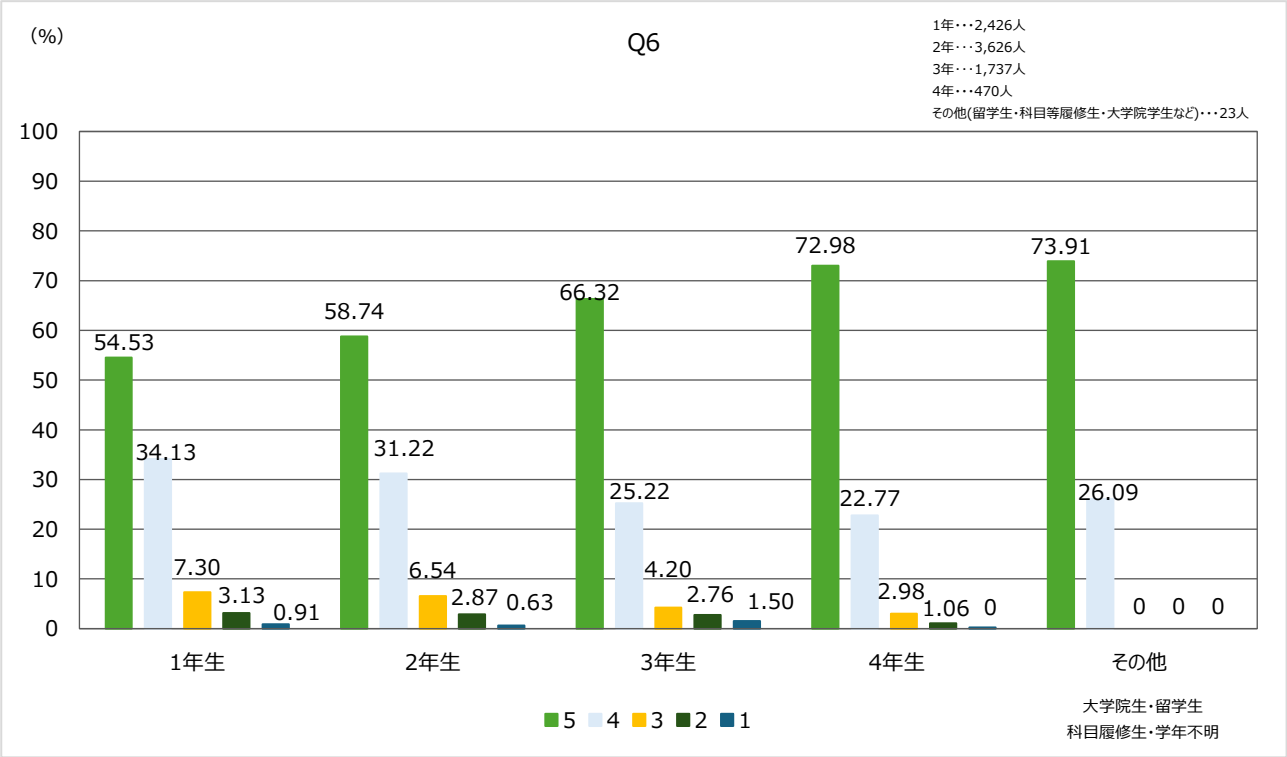


Q5. シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

5. よくあてはまい　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

（６）教員の説明の仕方・話し方

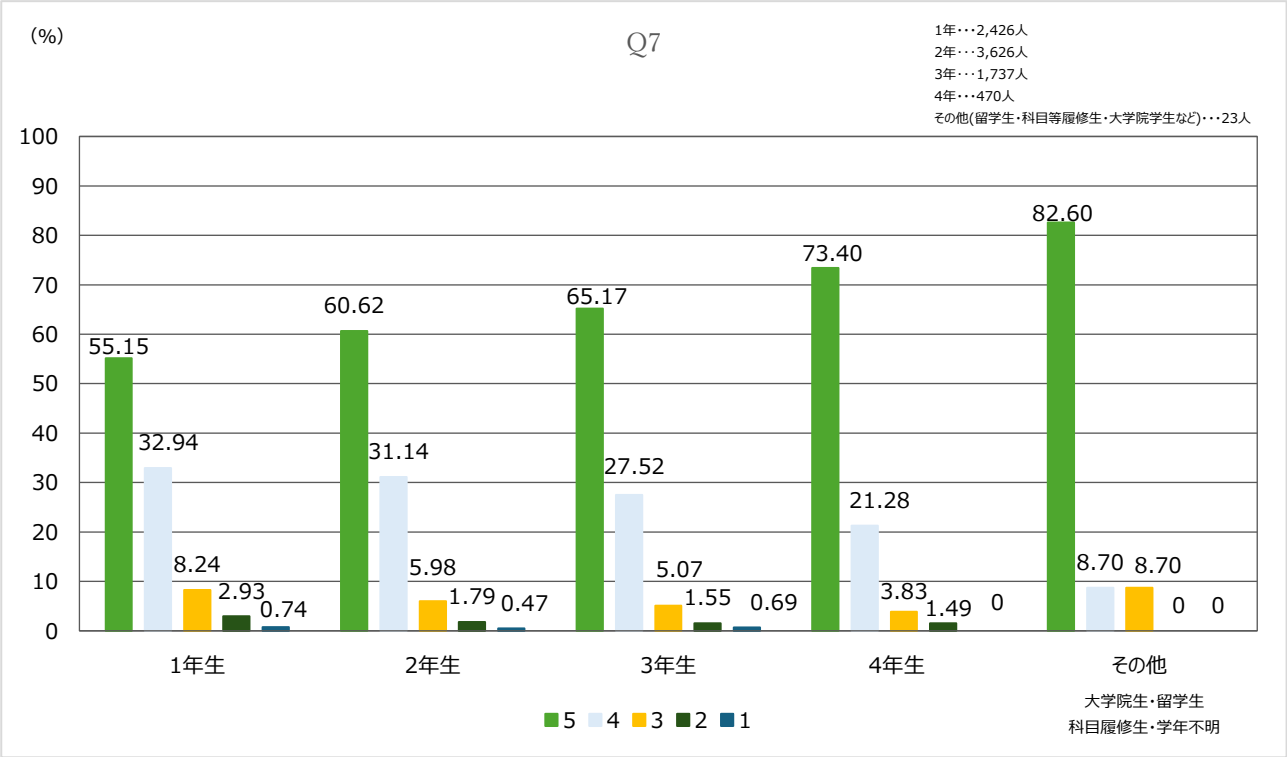


Q6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

（７）教材への満足度

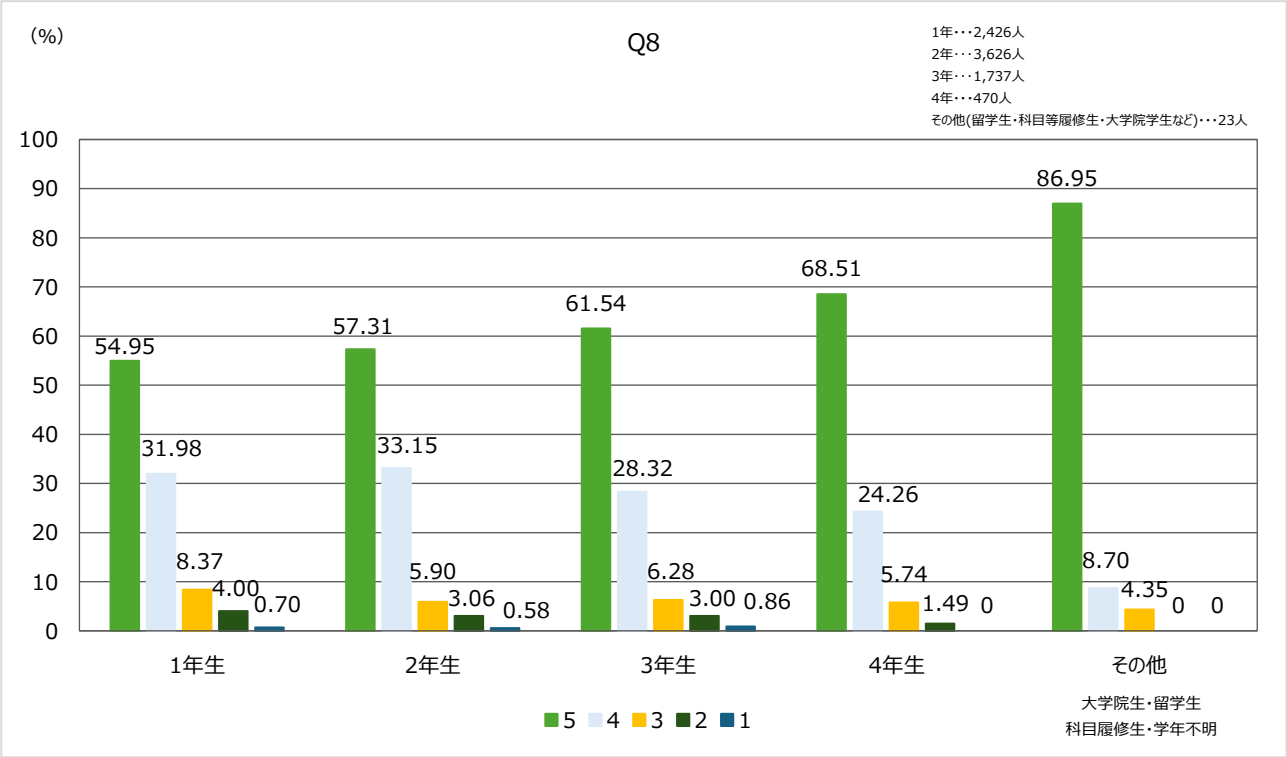


Q7. 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

（８）授業内容の分量・速度

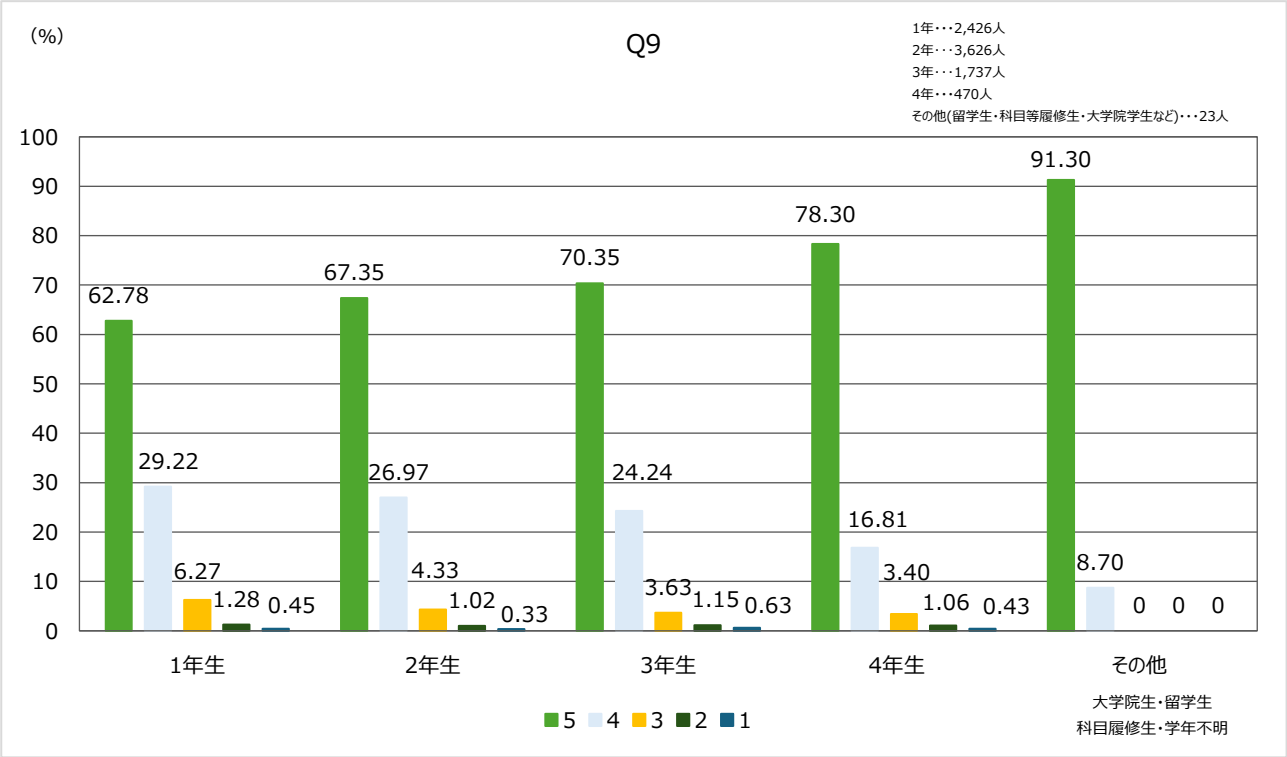


Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

（９）教員の授業運営



Q9. 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

第２章　専任教員による授業報告書

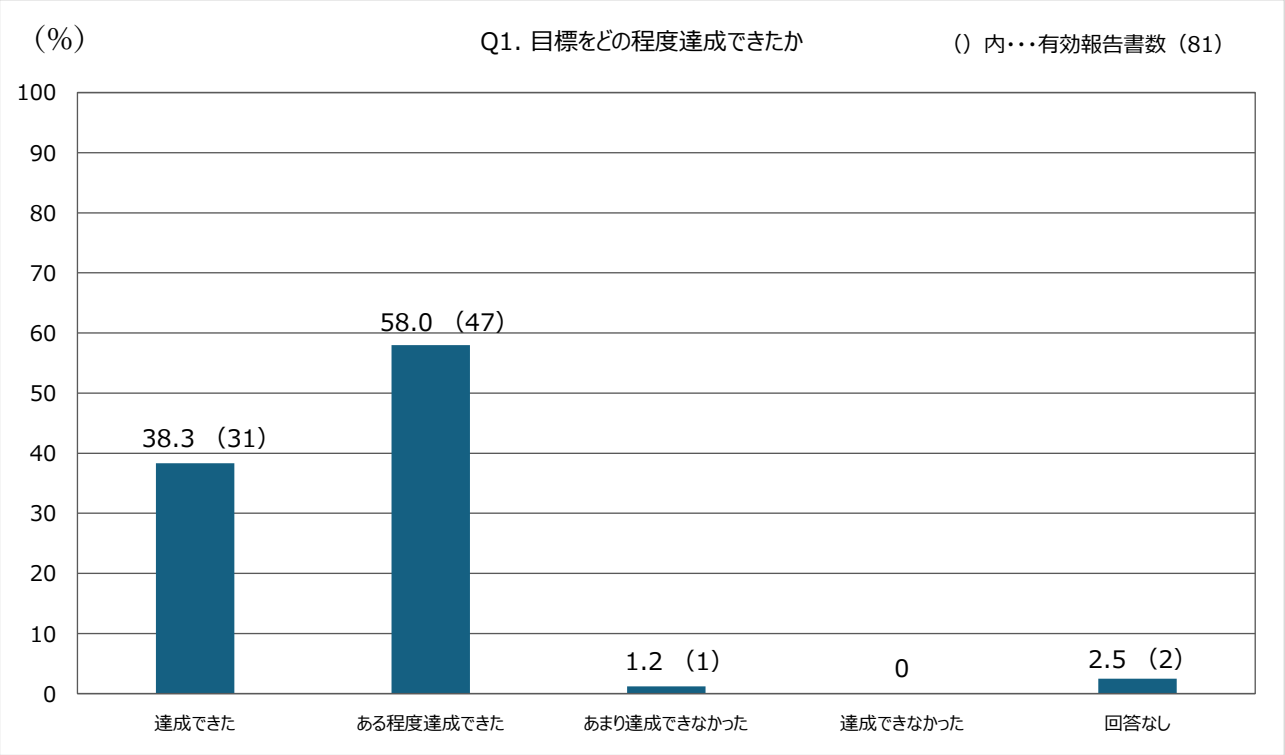
学生の授業評価結果を受け、授業担当教員は下記の点について、自らの授業を振り返るとともに大学に対する提案を行うことで授業改善を図っている（巻末の報告用フォーム参照）。報告書の提出については 2 科目以上実施科目がある場合は、1 科目の提出でも構わないことになっている。尚、本年度の報告書提出数は 81 科目であった。以降、専任教員の全体の傾向を見ていきたい。

・授業目標の達成度認知
・授業の目標を達成する上で効果的な方法や工夫
・教室設備について（問題点等）
・教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について
・学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
・学科や大学全体として取り組むべきこと
・授業評価に関する意見、提言
・その他

１．授業報告のまとめ

（１）授業の目標達成度

専任教員に授業達成度を尋ねたところ、授業の 4 割弱で「達成できた」、残りの 6 割弱で「ある程度達成できた」と回答されている。専任教員の認識としては一部に課題を残しながらも、授業は概ね目標を達成できたと考えられている。昨年度に比べると「達成できた」が 47%から 38%に低下している。次年度の動向に注目したい。



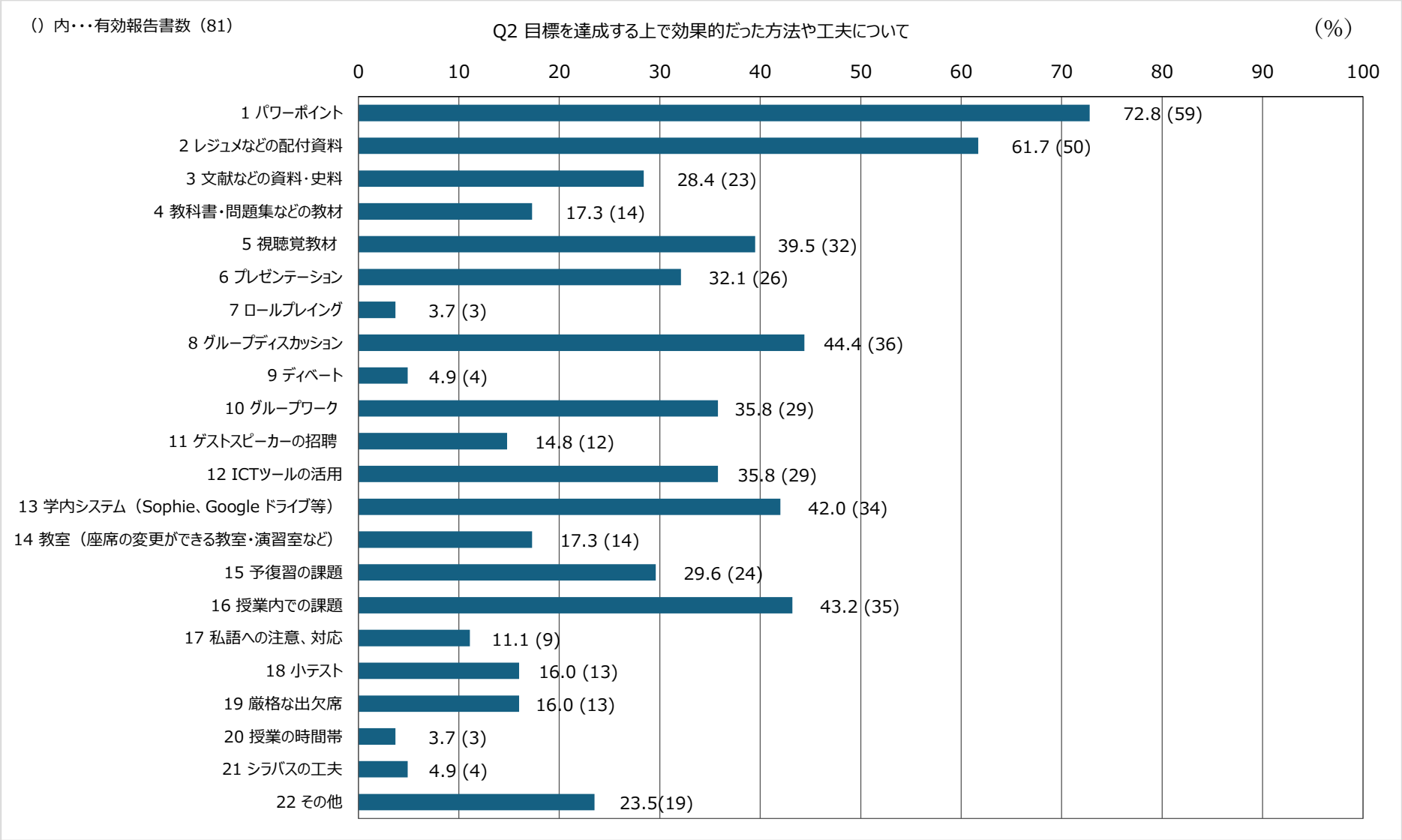
（２）目標を達成する上で効果的だった方法や工夫

目標を達成する上で効果的だった工夫・方法としては「パワーポイント」が 73%と最も多く、次いで「レジュメなどの配付資料」が 62%と続いている。さらに、「グループディスカッション」「学内システム（Sophie・Google Drive)」「授業内での課題」「視聴覚教材」が 4 割台で多い。

2023 年度と比べると、「パワーポイント」が 64%から 73%へ、「プレゼン」が 25%から 32%へ、また「グループワーク」が 24%から 36%へと伸びる一方、「レジュメ」は 68%から 62%へ、「文献資料・史料」が 43%から 28%へと低下している。紙媒体からデジタルへ、座学から参加型授業へと効果的な方法がシフトしている様子が示されている。

尚、24%の授業で「その他」として何らかの方策があげられた。具体的には下記の内容になる。件数としては少ないものの、今後、教員が効果的な教育方法を新たに導入する上で有用な情報が含まれていると考えられる。

＜22 その他の内容＞
出欠を取らなかったこと
個別の声掛け・問題対応
授業運営の工夫
ドライブ共有した資料
授業中の小休憩
板書
授業冒頭での他の受講生の質問・意見等の共有と回答
INSPIRE プログラムに基づくコース独自のプログラム
語句註釈、語彙初出箇所一覧、原文テクストの作成と配布
前回の授業のフィードバックから毎回の授業をはじめたこと
毎回フィードバックから授業をはじめたこと
レポート提出の 2 段階化（中間で添削し、学期末で仕上げて提出）
最終評価のために、授業中の筆記テストを実施した。
体験的活動
実技
近隣の保育園と連携し、実際に幼児と遊ぶ体験を行った
ミニワークショップ
質疑応答などの双方向性
実習、TA によるレポート添削


（）内･･･有効報告書数（81）
Q2 目標を達成する上で効果的だった方法や工夫について
（%）
0
10
20
30
40
50
60
70
80
90
100
1 パワーポイント
72.8 (59)
2 レジュメなどの配付資料
61.7 (50)
3 文献などの資料･史料
28.4 (23)
4 教科書･問題集などの教材
17.3 (14)
5 視聴覚教材
39.5 (32)
6 プレゼンテーション
32.1 (26)
7 ロールプレイング
3.7 (3)
8 グループディスカッション
44.4 (36)
9 ディベート
4.9 (4)
10 グループワーク
35.8 (29)
11 ゲストスピーカーの招聘
14.8 (12)
12 ICTツールの活用
35.8 (29)
13 学内システム（Sophie、Google ドライブ等）
42.0 (34)
14 教室（座席の変更ができる教室･演習室など）
17.3 (14)
15 予復習の課題
29.6 (24)
16 授業内での課題
43.2 (35)
17 私語への注意、対応
11.1 (9)
18 小テスト
16.0 (13)
19 厳格な出欠席
16.0 (13)
20 授業の時間帯
3.7 (3)
21 シラバスの工夫
4.9 (4)
22 その他
23.5(19)

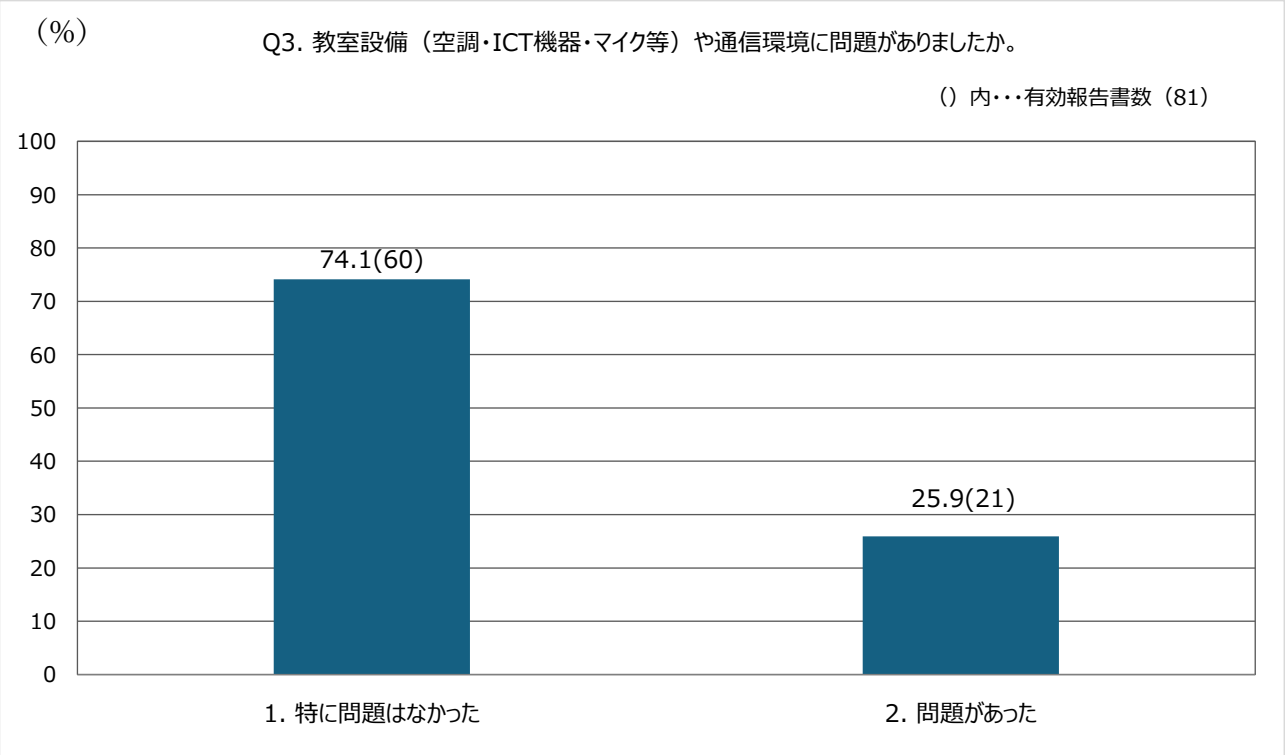
（３）各教員からのコメント

教室設備について（問題点等）、教員個人が取り組むべきこと、学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について、学科や大学全体として取り組むべきこと、授業評価に関する意見、提言、その他の各項目については自由記述形式で回答を求めた。

以降はこれらの項目ごとに、各報告をまとめている。教員名、授業名は伏せているが、原則、プライベートな情報以外は原文のままを掲載している。

１）教室設備の問題

74%の授業で教室・設備に「特に問題はなかった」と回答されているが、「問題があった」との回答も2割あった。具体的な内容を以下の表にまとめた。



Q3. 教室設備（空調・ICT 機器・マイク等）や通信環境に問題について	
341 番教室	「映像配信」のボタンを押すと、同時間帯に別の教室で行われている授業の音声と映像が映る。
203 番教室	ワイヤレスマイクが 2 つあるが、どちらも充電切れになっていることが多く、その場合は、地声を張り上げて授業するので、改善してもらえるとありがたい。本授業は 4 限で、それまでの時間で使用され、使用後にしっかり充電されていなかったのではないかと思われる。ワイヤレスではないマイクもあるが、授業中に学生の方まで行ったり来たり動き回り、また学生から意見を言ってもらうこともよくあるため、ワイヤレスマイクが必須である。
220	テレビ型のプロジェクターで接続がうまくいかず時間がかかることがありました。その点がアンケートのコメントに書かれています。
205 番教室	プロジェクターの色や鮮明度に問題があった。
205 番教室	ワイヤレスマイクの充電が、授業途中で切れてしまう。
	テレビの設置場所が黒板の右端で、柱があるために座る場所によって画面が見えないという問題があった。次回は少し広めの教室で授業をしたい。
ブリット記念ホール	一部の証明が不安定で、点いたり消えたりしている
ブリット記念ホール	一部の証明が点いたり消えたりする
ブリット記念ホール	天井の照明に不具合があった。
ブリット記念ホール	天井の照明に不具合があった。
403 教室	蛍光灯がずっと消えたまま。床が壊れていて、学生や教員が転びそうになる。
25 番教室	DVD、BD の表示ができませんでした。
205 教室	DVD プレイヤー（B-ray?）に問題があった。教卓のシステムが古く、プロジェクターの鮮明度も良くはない。
204 番教室	プロジェクターの明るさが暗いこと。時々前方ドア上のスピーカーから音が出ないこと。
204 番教室	プロジェクターの明るさ　前方ドア上のスピーカーから時々音声が出ないこと

Q3. 教室設備（空調・ICT 機器・マイク等）や通信環境に問題について	
203 教室	プロジェクターと PC がつながらない時がありました。リモコンやマイクの電池切れが多かったようです。とくに手持ちのワイヤレスマイクの充電は 100 分持たず、毎回途中で切れました。それはそれで受講生全員に共通した思い出にはなりましたが、改善していただけるとたいへん嬉しいです。
40 番教室	ネット環境以前に、スクリーンが黒板を半分程度隠してしまうので、使いづらい
	・受講者数（90 名ほど）に対してグループディスカッションを行える環境のある教室が空いておらず学生に不便をかけた。 ・終盤に教室内のプロジェクターが故障した。音声を流す必要があったため、至急の修繕をお願いしたが実現されず（授業期間終了後の修繕となった）、授業運営に苦労した。
312 番教室	プロジェクタースクリーンの位置が左寄りのため、座席の位置によっては見えにくい。また、椅子が可動するため、授業に集中できなかったとの指摘もあった。
宮代ホール	学生から Wi-Fi が繋がりにくいという申告があった。また，机が小さく，ノートを取るには適していなかった。
4 号館 アクティビティスペース	教室の中心に大きな柱があるので、プロジェクター（スライド）が見えにくいとの声がありました。

２）教員個人が取り組むべきこと

各授業において、効果的な授業や運営を行うため、教員個人が取り組むべきこととして下記の内容が報告された。

Q4. 授業内容、運用、カリキュラム編成などについて、特にご意見、ご提言がありましたら自由に記述してください。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について（ご自身のことでなくても結構です）
もっと生徒と交流したいです。生徒の中には積極的でない者もいます。
プレゼンテーションは学生が取り組みやすいようだが、レポート、論文を書くのはどうも苦手は学生が多いようなので、より丁寧に指導する必要がありそうだ、
これまではこの授業では遅刻や欠席などの問題がある学生はあまりいなかったが今年度は一人出席に問題がある学生がおり、出席や遅刻を厳格にする必要があるかもしれないと思った。
遅刻や欠席の増加に対し、より毅然とした態度での対応が必要。
分からないこと、困ったことがあるときにそのサインを教師や周りの学生に表示するように促す。
欠席・遅刻が多い学生にどう対応するかが大変悩ましいが、辛抱強く見守れば期待通りでなくてもそれなりに前向きの姿勢を示してくれることは分かった。
説明を時々区切って、個別の作業状況を見て回ることが非常に重要。
(1) 英語で実施される講義も複数回あったが、難しい用語を簡単な表現で言い換えるなど工夫をすることで、学生が理解することができたようである。学生からは「英語だけの授業についていけるか心配だったが、理解できる工夫をしてもらえた」とのコメントが複数見られた。 (2) 大人数の講義科目であり、私語に対する注意は課題として残った。とくに後方の座席の学生達に対して私語をもっと注意してほしいという要望があった。 (3) オムニバス形式で、毎週課題を提出する授業であった。しかし、授業に出席したにもかかわらず課題未提出という学生が各回一定数いた。課題の形式や提出方法の統一、課題への取り組み方に対する指示の明確化など、来年度は少し工夫をしたい。
②でも述べるが、少人数授業のため、ディスカッションを多く取り入れたことは学生の取り組み促進だけでなく、クラスの雰囲気の良好化にも繋がり、学生にも好評だった。Google Classroom を利用したディスカッションクエスチョンへの意見収集は、トピックへの理解度や応用力を図るだけでなく、学生にとっては論証の練習にもなった。 また、ミニフィールドワークとして図書館に行き、オンライン以外の図書館リソースを使ったことは、その後の図書館利用促進にも繋がったようである。
continuity between grades and feedback

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について（ご自身のことでなくても結構です）
授業時間外の学習時間を増やすための工夫が必要と感じている。また Reflection Paper に対する効果的なフィードバックの方法などについて今後考えたい。（現在は次の時間に優れたリフレクションの優れた点について解説しているが、学生がどう受け止めているのかについてうまく把握できていないもどかしさがある。）
公平で明確な指示を出すこと、学生からの質問には真摯に対応すること、等。
演習では、あらかじめ本学図書館に注文して参考文献を揃える、また、オンライン・データベース等の使用方法を丁寧に指導する等、授業時間外の学修環境を整えるよう努めている。
本授業の目標は「文学と社会を結びつけて考察する」「受講生の視野を広げる」こと。そのため、 ①目標に適した教材選び ②受講生に実践させるワークやディスカッションの設定 ③ ②の前提として受講生に提供すべき情報の用意 ④受講生の能力向上に資するフィードバック（小レポート等における） ⑤毎回の授業運営計画 以上を徹底して行うこと。その上で、現場では臨機応変に対応すること。
予習復習にかけた時間が、１，２の返答で６割を超えていました。これが常態だろうと思います。そのことを自覚して、時間内で完結する講義を目指す必要があります。
授業冒頭に前回のリアクションペーパーに答えながら内容の復習をすること。授業中に５分の小休憩を入れること。その日のキーポイントを文章にまとめさせて、翌日中にリアクションペーパー（Google フォーム）を提出させること。
興味深いトピックを選ぶこと、それをわかりやすく見せること、同じことを自分でやってみて研究のきっかけをつかませること、テーマに選択権を与えることなどに注意している。
レポート作成や語学の予習では AI を多用する学生が一定数おり、これを防止する対策を講じる必要性を感じております。まずは、自転車やバイクをつかって持久走のトレーニングをする陸上選手はいないといった例え話で、AI を用いた予習や課題作成が無意味であることを説明した後、AI の利用が役に立たないような方法で授業を行いました。①予習では自力で訳せる部分と訳せない部分を判別することと、前者を訳すことを求めました。②授業では訳せない部分や間違っている部分を、詳細に説明しました。③毎回、授業の冒頭では、前回訳したテキストの一部を訳す小テストを課し、ノーヒントで英文を自力で訳してもらいました。期末テストでも同様にテキストの一部を訳す問題を出したため、AI を用いる余地は少なかったはずです。
授業中にＳＮＳ用の写真を撮影する学生がおり、それへの苦情も寄せられている。大人数の授業では、特に板書中には目が行き届かないため、対応に苦慮している。
各回の授業での学生の理解度を確認しながら、授業を進めること。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について（ご自身のことでなくても結構です）
大人数の講義であっても、授業内で学生の意見を聞けるような工夫が必要である。
全額共通の語学の授業とは別に行う講読の授業なので、文法や解釈だけでなく、時代背景や歴史の知識も解説に盛り込むよう努めた。
学生が、自分自身に引き付けて、現代社会のしくみと、そこに生きる人間のあり方について考え、学生の社会学的想像力を伸ばしていける機会にしていきたい。そのために、授業内容は身近なテーマではあるが、広い視野で考える必要のあるテーマを取り上げている。
・「グローバル共生副専攻」を修了する 4 年生のヒヤリングをした際、グループワークやゲストの招聘、ワークショップなど様々な手法を取り入れた授業への評価が高かったので、本授業でもそうした工夫を取り入れてみた。下記に記すように、通常の講義よりも高評価だったように思うので、さらに工夫を重ねてみたい。
毎週、授業中の内容を小テストにして復習としている。ただし、Google フォームでの課題提出は教室にいなくても可能なため、別途、紙で出席票を配布して出席を確認している。
座学で学んだことを、実際に自分たちで項目を作ってみる、データをとってみる、といった形で体験して学修の効果を高める
しっかり準備をして授業に臨むこと。 わかりやすい資料を作って共有すること。 課題等には解答例を作成して共有すること。
教科書を採用し、授業を進めたが、事前に教科書を読み込ませ、課題を出し、考えさせてきたことでディスカッションの効果が高まった。そのため、反転授業の効果の高さを実感した。ただし、多様な学生の意見や疑問（偏見の場合もある）に対する補足説明のため、教員自身は教科書の内容を超えた知識や最新の社会動向を把握しておく必要があることを実感した。
座学だけではなく、学外研修などを通して調査法を実践させることで、調査技法を習得できるよう授業を構成した。インタビューやフィールドワークを実践させるだけではなく、今年度は KJ 法を授業内でデータ整理の方法としてグループワークさせることで、系統だった質的データの整理法を身につけられた学生がいたことが最終課題から伺えた。
統計ソフトの利用を学ぶという授業であるため、苦手意識を持つ学生が一定数以上います。そのため、学生の様子をよく確認しながら、授業を運営していくことが重要と考えています。
紙とペンで手計算を行わせることで、本来計算機（コンピュータ）の裏で動いている処理を理解させることに手応えがあった。一方で受講者の計算能力がとても低いと感じるため、計算時間や解説・検算のための時間を、さらに取ることを心がけたい。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について（ご自身のことでなくても結構です）
2024 年度の本科目では、履修取りやめや期末試験を受験しなかった学生の数が多かったことから、担当者自身が考えるよりも内容が高度・難解であると受け取られたようである。都市社会学の学説史を理解するためには、高校世界史・日本史の知識が必須であるため、ついていけないと感じる学生が多くいた。 しかし、本科目は社会学の専門科目（社会学特講）として開講する以上、中学や高校までに身につけていることが前提の知識について過度に手厚い復習をするべきではなく、ひとまず来年度も「上のレベル」の学生に難易度を合わせて運営したい。つまり、新しく高度なことを吸収している、意欲のある学生が退屈しないような難易度設定を続ける予定である。そのかわり、講義各回につき、おおくの予習・復習を必要とすることを、シラバスにも記載した。
必修科目でありながら数学的な概念を教え、計算問題を解く授業であるため、受講者の理解度に極めて大きな差が生じた。よくできている学生は、統計検定を受験しても 3 級等に合格できるレベルを維持している一方で、下位の学生は、基本的な概念理解もおぼつかなかった。四則演算のみで計算のできる統計処理から丁寧に扱い、「理解できた」という成功体験をたくさん準備するなど、受講者のやる気を引き出すように工夫をしたい。
パワーポイント内の図表、イラストなどがわかりやすいとの意見が多かった。
板書を充実させる。そのことによって、履修者の授業の取り組みが真剣になる。
学生が恐縮せずなんでも話すことができるクラスの雰囲気作り。
講義資料は、授業のアウトラインを示すだけでなく、自習用資料としても使用可能なものとすべく改善を続けており、徐々に効果が出てきた。
学生の関心や興味を引き出すような仕掛けは重要ではないかと思います。
①教材の工夫：学生の理解度に合わせて、学生にとって身近で具体的な題材・トピックを積極的に用いる必要が（年々)高まっている。②考えさせるための工夫：授業の課題やリアペを生成系 AI に聞いてそのまま書く学生が急激に増えているため、問いの立て方や、思考のプロセスを主体的にたどらせる工夫が必要になっている。
様々な教員が、それぞれの特徴を持って取り組むこと。また、様々なキャリアを持っているゲストスピーカーの話も刺激的だったようです。留学生によるスピーチは、ものの見方の違いを知るいい機会になっていたり、留学することへの関心を高めているように思います。
課題の締め切りから発表までの期間などスケジュール管理の問題や，教員がグループ研究を見守っているだけではなく，もっと内容に踏み込んだ意見を出すなどして関与することへの学生の希望が，最終授業での聞き取りで判明した。学生の自主独立に少々期待しすぎたようだ。学生からの改善希望も明快であったので改善したい。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について（ご自身のことでなくても結構です）
配布文書（哲学科のサイトで公開済み）には、どうしても誤記が発生するので、授業を通じて誤記にチェックを入れる必要がある。
発表レジュメも課題レポートも、それぞれ教員が全文の例を作成し、それに基づいて発表してみせ、それらを真似て作成するように指導した。また 1 年生の前期 5 限という疲れた時間であることに配慮し、座学の時間はなるべく減らし、途中で息抜きのできるようにグループでの意見交換などの時間を設けた。学生の発表の回のあとには、Google フォームでコメントを全員に提出させ、それを全員に公開した。発表者は励みにもなったようで、また提出物を期限内に出すことのできない学生には個別に事情を聞き、どうすればよいかを一緒に考えることができた。
当然のことであるが、授業に参加する学生の関心や能力は一様ではない。その違いや個性を把握し、それぞれが授業に積極的に取り組めるよう、配慮することが重要だと思われる。演習などで授業中の発言を重視するとしても、それがしずらい学生が一定程度いることは事実である。そうした学生の意見や考えを引き出すために、さまざまな機会を設けることも必要だと思われる。
学生同士が意見を交換できるような機会が多いと他者の意見をきくことで、学生の思考力も伸びるのと思われる。
実習に関係する授業の一つであったため、できるだけ前学年の学生の経験談（講義内でのメッセージ含め）や児童養護施設に勤務し具体的にている先生の話（講演）などを授業構成に入れ、学生が実習に臨むに当たっての具体的な課題を整理することができるように働きかけるような授業スタイルを取った。
学んでいるという「実感」をどう持たせるのか。動機の低い学生（志望学科ではなかった）にどのように興味や関心を持たせるのか。
学生自身が授業内容を自分の言葉で咀嚼するために、理解深化のための思考・対話に従事しやすい流れで各回授業を組み立てる。2 年後期ゼミの特性として、学習科学というディシプリンの特徴が体験的に学べるように 14 回の流れを構築する
・スマホではなく PC やタブレットで学習するように指導しているにもかかわらず、スマホで学習している学生への指導の在り方。 ・授業時間中に学習課題に取り組まずに、SNS 等、課題とは異なる娯楽に勤しんでいる学生への指導の在り方。
アナログとデジタル両方での音楽づくり体験を通して、創作することについて考えることをめざした。音楽室の設備・備品（アナログでの音楽づくり）については問題ないが、学習支援センターの機器（surface）が若干使い勝手が悪いと感じた。Google　classroom の掲示板、課題を活用してデジタルの作品を迅速に提出・共有できて効果的であった。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について（ご自身のことでなくても結構です）
一方方向の授業ではなく、学生が授業内で互いに意見交換をしながら考えを深めていける授業の進め方
学生が考え、気づき、集中できる授業が展開できるように、年ごとに変わる学生の様子を見ながら授業の流れを考えるということを心がけている。
グループワークやディスカッション等、学生が主体的に取り組める方法をとると、学生たちはどんどん自分たちで発見する力をもっている。他機関との連携を深め、理論と実践を結び付ける授業がますます望まれる。
毎回の講義の最後にコメントペーパーを書いてもらい、次の回の最初にフィードバックをしている（「公表して構わない」という学生全員分のコメントをデータで共有しつつ、そのなかの代表的なものに対して教員がコメントする）が、学生同士がお互いのコメントを介して刺激し合えるのに加え、講義参加へのモチベーションを高めるのに役立っているようである。また、講義内容に関わる映像資料を積極的に用いているが、文字や音声だけでなく映像を介して講義内容を感じ取り理解することもできるので、効果的だったようである。
大人数の授業であるが、できるだけ多様な教授方法を用いておこなっており、その評価が高い。
学生の学力格差が大きくなっているため、毎年度学生の状況や関心を把握した上で授業の方法を工夫するなど柔軟な対応が求められる。
前日までに授業内容の資料を Google Classroom で配付したことは好評であった。
授業内容に関連して、外部講師を呼んだミニワークショップを行った。また、学外の美術館など社会教育施設を訪問するような取り組みも行った。
必修科目においては、できるだけ必修科目間の教室や開講時間帯を合わせるのが学生にとって重要だと思った。昨年は教室や時間が離れたことによってかなり学生の意欲に影響したように思われた。統計法は講義のみでも進行できるが、アクティブラーニングの手法を取り入れたり、プレゼンさせることは効果的だと実感した。計算への苦手意識はあっても、統計法自体への抵抗感はこうした教育方法で軽減されるように思う。
アクティブラーニングを取り入れた授業方法。
学生と教員、学生同士の良好な関係づくり、計画通りの進行、動機づけやコミットメントを高めるために「自分ごと」として考えられるような問いの設定
ゼミでグループディスカッションをしているが、学生の発言が活発になるように、どのようなやり方をするかということを次年度に向けて工夫しないといけないと思っています。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について（ご自身のことでなくても結構です）
・教員自身のプレゼンテーション技術の向上が重要であると感じます。スライドの見やすさなどはもちろん，喋り方や，Slido（https://www.slido.com/）を利用した投票，質問募集などのギミックの用い方など，工夫できるところはまだたくさんあると感じています。 ・また，受講生から，Google Classroom で授業前日に配布される資料をもっと早く見られるようにしてほしいという要望をいただきました。授業時間外の資料配布やフィードバックも含め，14 週の授業全体のより精緻なデザインが必要と思います。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
今年は、生徒たちを小グループに分け、各スピーカーについて調べ、質問をまとめてもらいました。これはうまくいったと思います。
毎回学生のコメントをしつこく求める
学生からの各発表者に対する improve するためのコメントをはっきり発言させることは良いと思っている。
パワーポイントを使用する場合でも、それを印刷して配布するのが学生に評判が良い。Google Classroom に課題を提出させた場合、大人数では難しいができるだけ個々にコメントを返す。
学生の志向性や能力がまちまちなので、個別に丁寧に対応すること。
意欲や能力の差が激しいので、プランに縛られず毎回柔軟に課題を設定すること。よくわかっている学生にほかの学生の指導補助的な役割をしてもらうこと。
Moodle のオンライン教室で毎回の個別達成度の表と、学習事項のまとめを掲示。毎回の作業と学習事項について英語で日記を書いてもらう。
(1)大教室での 200 名近い受講者のいる授業であったが、グループワークやペアワークを積極的に取り入れた教員が多く、学生からも「周りと意見交換できたことが楽しかった」「理解が深まった」と高評価であった。 (2) 講義の中で、クイズや視聴覚教材(YouTube, 映画)などを取り入れることで、講義内容により興味を持たせることができた。
１．学生がプレゼンテーションの中でディスカッションクエスチョンを提示する、２．それを Google Classroom の「質問」を通してクラス全員に課題として意見を提出させる、３．プレゼンテーションを行った学生が、翌週に意見の要約と特に印象に残ったものなどを発表し、追加の意見を募る、４．講師が個々へのフィードバック（Google Classroom)と全体への講評（授業）を行う、というサイクルを実施したところ、アクティブラーニングの日常化だけでなく、内容の理解やトピックへの関心度の向上に繋がった。
early and consistent communication between the teacher and the student
授業の本題に入る前に、当日の講義のキーコンセプト・キーワードに関わる簡単な質問（Warm-up Quiz)を１つ出し、その場で収集した回答を共有し簡単なフィードバックを行った。受講生は、近くの学生と意見交換をした後、Google フォームに回答を提出。評価対象外。従来は授業の途中で説明していた概念やキーワードを授業冒頭に導入することで、授業を聞く姿勢が積極的になり、集中力が最後まで続いた（Warm-up Quiz をしない回と比較して明らかな違いが見られた）。回答の収集に意外に時間はかかったが、学生の理解度を把握して授業を進めることができた。
講義の授業で受身の姿勢ならないよう、授業内で周りの学生と話し合う時間を作り、協力して課題に取り組んだり、意見を交換したりできるようにしている。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
演習における質疑応答（発表者に対する質問・意見、それに対する発表者からの回答）を授業中に行うだけでなく、GoogleClassroom の質問機能を利用して授業終了後 1 週間以内にやりとりする方式を採用している。教員から見て、教室内のみの質疑応答より、明らかに議論が深まっていると感じる。受講生にもアンケート自由記述欄で感想を聞いたところ、質問者・回答者いずれの立場でも、じっくり考えて記入できること、他の受講生の意見を広く知れることを評価する意見が 8 名からあり、消極的な意見はなかった。
上記①（目標に適した教材選び）に関連して：何のために今この文学テキストを読み、ディスカッションを行うのか？　それが受講生たちの今後の学業や、卒業後の生活にどうつながるのか？　これらについて教員が自分の言葉で訴え続けること。 上記④（受講生の能力向上に資するフィードバック（小レポート等における））に関連して：学期中に小レポートを 6 回提出させる。その都度、各受講生の評点、採点基準、優秀解答例をフィードバックした。かつ、どのように書けばよりよいレポートになるのか、受講生自身にグループワークで考えさせた。このワークのあと、小レポートの水準が向上し、最後の 2 回では 85~90%の解答が A 評価を獲得、残りも B 評価というまでに伸びた。
グループディスカッションは反応が良かった。しかし、それによって教員が話す時間が短くなるデメリットもあります。
文学史は暗記の必要な科目であるため、適宜自分で書き込むタイプの資料を配付した。その点に関して学生の評価は高かったのは、一方的に聞くよりも作業をした方が覚えるということだろう。授業の最初（前回の振り返り）と最後（今回のまとめ）を行った点も学生の理解度を高めたように思う。一方で、本当に試験勉強をしたのか、という成績の学生も散見し、学習意欲の低い学生をどのように授業に引き込むのか、という点は今後も工夫していく必要がある。
授業中に話題が一段落したところで、周りの学生同士で確認し合わせること。その日の授業内容の重要な部分をリアクションペーパーに文章でまとめさせること。
授業を聞いていないと最終評価で点数がとれないという緊張感は大事かと思う。
授業中は常に質問を促し、常に時間をかけて丁寧に答えることを心がけました。
コメントペーパーに寄せられた授業に関する質問については、授業内で回答することで、学生の授業に対するモチベーションが上がるように感じています。
板書を筆記させて学生に手を動かせる
授業内で意見を出しやすくすること。
Google フォームから匿名設定で意見を出してもらい、スクリーンで共有する。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
語学の講読にあたっては、参加する学生の興味や関心に応じて、適切なテキストを選択することが何よりも重要であるが、今回はウィーンの宮廷舞踏会に関するテキストを使用したため、学生たちも熱心に予習・復習を行なっていた。
なるべく授業のテーマに関する動画をみるようにしたが、学生の感想をみると学生の理解度が動画をみることであがっているようである。また、授業の途中でグループディスカッションをいれたが、意見交換することは学生に評価されていた。
・一方的な講義になりがちな欠点をカバーするために、マイクを教室の端から端まで回し、なるべく学生の声を聞くように努力した。学生は、ときには教師の声よりも、隣に座る人の言葉を知りたいと思うため、なるべく双方向の授業になる様に工夫した。有線マイクしかなかったために、ワイヤレスを設置してもらい、格段に良くなった。発言の機会が多かった事について、下記の通り、学生からの評価が高かった。
授業途中で全員に Google フォームで課題を出し、その結果を授業中に紹介することで知識の定着を図る
授業の前半は講義、後半はワーク、というようにメリハリをつけて集中力を維持する
復習としてノートを作ることを推奨している。 例年、よくできたノートの例（動画）をクラスルームで共有している。
ただディスカッションをするだけではなく、グループを作り、メンバーを固定した。それにより回を重ねるごとに忌憚ない意見が出るようになったり、教科書の精読をさぼったりする学生が少なかったように感じた。
毎回の授業では外国の事例を扱っていたが、その前に必ず日本の身近な観光現象について触れるようにしていた。それにより、海外の事例を身近に感じる学生が多くなったように思われた。
統計の復習とソフトの説明をしますが、学生が話を聞くだけでは不十分です。実際にソフトを操作して、更に課題に取り組んでもらいます。
紙とペンで手計算を行わせることで、本来計算機（コンピュータ）の裏で動いている処理を理解させることに手応えがあった。一方で受講者の計算能力がとても低いと感じるため、計算時間や解説・検算のための時間を、さらに取ることを心がけたい。 また、学期中に 2 度の中間テストを実施した。これはそれまでの単元の復習になるということで、受講者にも好評であり、事実、期末試験においても中間試験で出題した範囲については得点率が高かった。また工夫として、試験では公式集の配布はせず、受講者自身が重要だと思う数式・公式をまとめた「カンニングペーパー」の持ち込みを許可した。これが学習内容の復習のよいきっかけになったようである。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
学生の自由回答から以下の点が指摘できる。まず、学生の興味・関心に寄り添った具体例を示すことが効果的と考えられる。また、課題への学生の意見や質問を授業の冒頭で共有するとともに、それに関連したコメントを行ったが、学生自身が他の学生と自分を比較し、新たな気づきを得ることにつながり、授業への動機づけを高めたと考えられる。
辞書を引かせる時間を取る。なんでもデジタルで済む時代であるからこそ、基本的な学習態度を習得させる必要がある。
学生自身が調べ学習に取り組み、学習内容に気づきがあることで、さらに深い学びがあると感じた。
授業の冒頭で、小課題に取り組んでもらい、講義内容への興味を引き出す。
学生自身が関心を持つことについて取り組み、探索できる機会を作ることは有効ではないかと思います。
①グループワークは、教員が課題や取組み方を適切に設計すれば効果が高い。②そのためには、講義形式の授業でもある程度は、履修者数の制限は必要。教室定員ぎりぎりまで履修登録を認めると、座席がぎゅうぎゅうで学生たちにはストレスがかかる。特に 204 教室（と 205 教室）で 160 人以上の履修者がいると、授業開始直前に入室する学生たちが、席を詰めてもらえるようにいちいち声掛けしないと座れず、座席を見つけられない学生は諦めて帰ってしまうこともたびたびあった。
１年生向けの授業ですので、学科の２年生の取り組みを見たり、グループワークで直接話を聞いたりすることが有益だったようです。
教員が学生１人ひとりを理解し，教員から適切なアドバイスがもらえることを学生は切望している。見守られていることを伝えることで、１人ひとりの自己肯定感と学びへのモチベーションが上がり、成長が加速するようである。まだ授業は完成ではないがそれでも，学生がひとつひとつの課題に取り組む中で非常に多くのことを学んでいることが日々のリアクションペーパーから分かり，最終課題のテーマ選定で示した問題意識や取り組みの内容が、１年前の水準とは比べものにならない成長を示していたことに驚いた。
難解な古典語の読解なので、丁寧な語句註釈を用意する必要がある。
個人発表と課題レポートのテーマ・内容を同じにすることにより、この授業をクリアするために必要な負担を減らしたこと、グループワークのためのチームを組むにあたり、初回に出身、高校種別（私立・公立、共学・別学、キリスト教系・それ以外…）や趣味、将来の希望などを丁寧に聞き取り、それをもとに趣味や好みの近い学生同士でありつつ、なるべく高校時代の生活の異なる者同士を組み合わせるように留意した。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
単純なことではあるが、授業時の机の配置は重要だと思われる。演習の場合、多少人数が多くとも、互いに向き合える環境を作ることがディスカッションをする促しとなる。
質疑応答の時間や、グループディスカッション、発表を通して、他の学生の事例考察をシェアし、実習に対する課題や不安を自分のこととして捉え、深い理解が進むように働きかけた。また、他の学生の見解を理解することで、様々な視点を考えられるように促した。
デジタルではなく、逆にアナログ的な作業。手で書いたり、声を出したりすること。
知識構成型ジグソー法によるグループワーク、講義、グループ単位での調査活動、ウォームアップ＆振り返りの個人課題などの組み合わせ
「成績」「ペナルティ」「叱責・注意」で学生をコントロールする方法ではない方法。 おもしろい授業、対話型授業、問題に基づいた学習（PBL）、学んだ内容を実践する機会の提供、自身の成長を感じられる機会の提供など。
作品を途中経過、完成品の複数の時点で共有、相互評価することで、創作の刺激になった。
・座席をランダムに指定することで、新たな出会いをうむ ・レポートやリアクションペーパーなど、学生が提出したものに対して必ずコメントをする。回答があると、学生の書くことへの意欲につながる。
体験的な活動や学生自身が調べ、考え発表する活動は有効であると思われる。
今回、近隣の保育園の子どもと触れ合いながら遊びの重要性を学ぶ機会を 2 回導入し、とても大きな学習効果と学生の意欲を高めることができた。「体験」と「理論」を結びつけるような授業方法が必要だと思われる。
毎回の講義の最後にコメントペーパーを書いてもらい、次の回の最初にフィードバックをしている（「公表して構わない」という学生全員分のコメントをデータで共有しつつ、そのなかの代表的なものに対して教員がコメントする）が、学生同士がお互いのコメントを介して刺激し合えるのに加え、講義参加へのモチベーションを高めるのに役立っているようである。また、講義内容に関わる映像資料を積極的に用いているが、文字や音声だけでなく映像を介して講義内容を感じ取り理解することもできるので、効果的だったようである。
各自の生活に応用できる内容であったことの評価が高い。映像教材（特にビデオ教材）を途中に入れる点についても評価が高い。
随時学生同士の意見交換やグループワークを取り入れることは効果的だが、そればかりでは疲れてしまい知識の定着にはつながらないようだ。
映像資料を用いるなどの工夫をしたが、対面であっても 100 分間の講義に集中することは難しい学生もいるようで、途中に 5 分程度の休み時間を設けられたら良いのではと思った。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
実際に授業内容にかかわる体験をすると、学びへの動機づけが高まる。また、外部講師を呼ぶと学校を外の社会に対する意識が高まり、社会に出た後も想定した自分の人生の目標を探そうとする傾向があると思う。
アクティブラーニングの手法。ペアシェアやジグソー法、グループ分けしてその中で発表させ合うことはどの講義でも手軽に取り入れることができるし、学生も能動的に学ぶことができる。
アクティブラーニングを取り入れた授業方法。
この授業については、事例についてのディスカッションとロールプレイング
上述の Slido（https://www.slido.com/）は，かなり効果的でした。匿名で質問を募集できる，あるいは意見投票ができる，など，受講生を飽きさせない工夫ができました。スマートフォンを片手に授業を受けることを止めさせることはほぼ不可能ですので，それを逆手にとって，各自のスマートフォンで授業に参加させることが，受講生の意欲の向上につながっていたと思います。
一方向的な講義形式ではないグループワーク、ディスカッションなどの実施
グループワークは効果的ではあるが、シラバスや授業初回にグループワークで授業を進めていくことへの了解を得ることが必須である（一人ひとりの学びを豊かにするためのグループづくりなども含め）。グループ内での役割分担など、コミュニケーションがとれているグループは問題ないが、学生が積極的に授業に臨めるような声かけや助言なども大切であると感じている。

③ 学科や大学全体として取り組むべきことについて
教室の整備。試験の日に教室の変更をしてわかったが、２号館に出入口が後ろ１か所にしかない教室があり、防災上の問題があるのではないか。
コンピュータの作業を一緒にしていく場合、上記の個別対応は教員一人では対応に限界があるので、指導補助者が付くのが理想。
意欲や能力の格差。
毎年必ず１年生のほうが２年生よりも達成度が高いのはどうしたことか。学科のイメージダウンになるのではといつも心配になる。
英語文化コミュニケーション学科は「英語だけ」を勉強する学科であるという誤ったイメージが広がっている。学科で学べる内容の広さ（メディア、文学、英語教育など）について、１年生に知ってもらうことができたという意味では、授業の目的がある程度達成できた。
別の授業の話になるが、多国籍社員のいる会社に勤める本学卒業生から「授業中に意見を述べるだけではなく、お互いの意見をぶつけて議論する機会をもつことが重要」とのアドバイスがあった。ディプロマポリシーとも合致しており、授業の中でこうした機会を取り入れられると良い。
more support for students who are struggling and how we are going to create the new curriculum
授業外学習時間を増やすための、他の先生方のグッドプラクティスについて共有していただきたい。
FD 情報の共有を積極的にはかる。 たとえば、（上記④受講生の能力向上に資するフィードバック（小レポート等における）に関連して）きめ細かなフィードバックは教員の負担が大きい。しかし ICT ツールを利用して効率を上げることができる。私は GoogleClassroom で、提出課題に対するコメント機能を利用して評点をフィードバックした。同一文章のコピペが可能なので省力化できる。もっと便利な方法があれば共有してほしい。
学生情報を共有すること。
レポート課題の出し方に対する検討です。この一年で、AI で作成されたレポートかどうかを内容から判断することが難しくなりました。
ハード面を改良するための収入の確保（授業料や入学検定料に依存しない収益体質の構築）
科目全体の体系性を考慮して科目を用意すること。
この一年間で生成 AI の能力の向上を実感した。生成 AI の使用を前提としつつ、学生の思考力や表現力をどのように鍛えるかを考える必要がある。

今回は映画の鑑賞に適した設備（映写機とスクリーン）のある教室で授業を行うことができ、学生たちに好評であった。少人数の授業であっても、映画を教材として使用する場合には、画面の小さいブラウン管テレビよりもスクリーンがあった方が格段に効果的であると感じた。
ブリット記念ホールで授業を行ったが、机が小さく、PC を置くとノートや他の資料等がおけない。机を４－５教室にあるような机に入れ替えてほしい。
・「204」教室を学科で使用した際、プロジェクタの露光が弱すぎて、部屋を真っ暗にしないと見えないほどの状態だった。手元資料があったから良かったが、学生が話者を見ずに話を聞くという状態となり、あまり良くないと思った。プロジェクタの改善は急務だと思う。
昨今の学生は手でノートをとる習慣がなく、スクリーンをテレビ画面のように流し見する、内容が定着していない、といった傾向が見られる。
社会調査士科目だが、これまで非常勤の先生に一任しており、内容の確認や、他の授業との連携が不足していた。文献検索や、統計の復習など、他の授業と密に連携して内容を組み立てるために、専任教員が担当することが望ましい。
インフラ整備。 履修環境の整備。
統計ソフトを使用する以前の問題として、最低限、基本的な PC スキルを身につけておく必要があります。そのため、２年生までには基本的な PC スキルを身につけるように促す取り組みは必要と考えます。
対面形式の講義科目においても、オンラインツールを活用できる環境を整えることが有効だと考える。上記で示したように、学生は他の学生の意見等を聞くことで、自身の考え方を深めることができている。この点は GPS アカデミックでのアンケートでも示されている。チャット等のツールを使って学生の意見をリアルタイムで画面に表示できるような仕組みがあると、少人数授業だけでなく、大人数の講義形式においても同様の効果を持たせることが可能と考えられる。
無理だとは思うが、教室や黒板をもう少し広くしてほしい。1 号館 4 階の教室はどれも、大学の学習環境とはとうてい思えない。
Be*hive のワークショップスペースのような、机がついた椅子で、自由に配置できるような、グループ学習やディスカッションがしやすい教室が増えると良い。この授業ではないが、多くの教室でマイクが 100 分授業に十分な充電ができないところが多いので、新しくしてほしい。

学生からも指摘があったように、ワークショップ形式の授業は「適正な学生数」というものがある。下限は不要だが、人数の上限は設けるべきではないだろうか。 この科目は、私の所属学科である国際交流学科、なかんずく異文化コミュニケーションコースの学生にとって最大の教育効果をもたらすように設計されて設置されている科目であるにもかかわらず、他学科の学生で、もしかすると「単に時間割上の都合」や「バイトの都合」で、この曜日・時間帯に＜なんでもいいから単位を取りに来ている＞だけの受講生がいる可能性を排除できない。 この場合、「ワークショップ形式」（グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション）を機能不全にさせるような人数に「目的意識の低い、単位を取るためだけに来ている学生」で膨らんでしまうことは、主体的に当該学科を選び、高い問題意識を持ってこの科目を受講しようとしていた当該学科の学生に不利益をもたらす結果となってしまう。 ワークショップ形式の授業など、人数の多さと教育効果が反比例してしまうような科目は、学科や学年といった判断基準で人数制限をかけられるようにすべきではないだろうか。
様々な特性を持つ学生が出会うことで、学生が関心を持っている分野について、教員からだけでなく、学生同士が学び合う機会を意識的に提供することは、有意義で貴重な役割ではないかと思っています。
①古い AV 卓（設備）の更新、特にプロジェクターやスクリーン周りの機材、スイッチ位置をアップデートする必要がある。教室を暗くしてプロジェクター（スクリーン投影）を使用するのは現代的ではない。②少人数制の大学に相応しい、適切な履修者数制限。
日本語スピーチ大会については、現状は、国際交流学科の学生向けになっていますが、他の学科の学生からの参加もしてもらえるようになるといいなあと思っています。
グローバル社会コースは，２年生教育は専門課程の基礎となる大切なものと位置づけ，「自分計画」などコース独自の工夫に加え，国際交流学科が目指す DP を実現するため、修正を加えながらカリキュラムの改善を続けていきたい。
少人数の履修者ですが、こういった授業の存続をお願いします。
たとえば本年度の基礎課程演習の工夫や問題点を抽出し、専任教員全員が意見交換する FD 研修などをすべきではないか。1 年次も我々の大事な学生であり、その 1 年間の教育は全学共通科目にお任せという状態はよくないのではないか。 なお、今年のこの演習には、一度も授業に参加しないまま会うこともままならず終わった学生が 1 名、5 月と 6 月に 2 回手ぶらで現れて、テーマが何であるかも理解していない留学生が 1 名あった。1 年次センターや国際センターに状況を報告したり、また情報をいただいたりしながら進めたが、AA の役目はほぼ果たせなかった。各センターにたいへん熱心に対応していただいたことに感謝しているが、センターとしては相当の負担だったことと想像する。

多様な層の学生がそれぞれに合った授業と出会い、アカデミックな関心を高め、自身の学びを深めていけるよう、学科としても、大学全体としても、そのカリキュラムを考えていくことが必要である。
剽窃や AI の間違った使用法について明確なガイドラインを作成する必要がある。
視聴覚教材が教室の機材と合わずに映像が見られないケースがあり、対応に苦慮したので、様々なデータに対応できると有難く存じます。同じ形式のデータでも映らないケースが御座いました。
カリキュラムの柔軟性。シラバスの柔軟性。
各学年の到達目標の「具体像」の明確化と共有
・「成績」「ペナルティ」「叱責・注意」で学生をコントロールする方法のデメリットの周知徹底（特に学生が「選択」する余地の少ない全学必修科目において）。 ・コピペ（剽窃）や生成 AI の丸ごとコピー等への対策。「不正行為」の幅の拡張、生成 AI 使用ガイドラインの作成、不正行為へのルールの明確化、厳罰化（「規則」は厳しく、「運用」は柔軟に・優しく）。
授業後半（デジタルでの音楽づくり）は学習支援センターの機器を使っての授業展開であったが、将来的には音楽室でもこれができるような設備があることが望ましい。教科教育の観点からも、学校現場の ICT 活用に大学の設備が全く追いついていない現状がある。
学生が受けてよかったと思う授業の工夫をしたい
教室設備の面で言うと、本講義は人数が多い講義だったので「教室が窮屈だった」という声があった。また、「机が高くて授業が受けにくい」という声もあった。
受講生が多く、出席をフォームでとるのだが、出席していないのに出席にフォームを提出している人がいるという学生からの指摘があった。他の教室や学寮にいる者へ出席している者が連絡しているようであり、モラルの徹底は必要かと思う。 また、wifi の調子が悪い日があったりして出席の提出がぎりぎりになってしまったりしたという指摘があった。
講義式の授業で、教室の後ろの方にばかり着席して内職をしたり、授業中にスマホに出るために出入りすることや、ゲストスピーカーがいる前で平気で机の上につっぷして眠るようなことはマナー違反であることを、１年生のうちから教えてあげる必要がある。
学科では教員の専門分野を一つの入り口として、各分野を深く知ることが重要だと思う。その際に、いきなり論文を読むだけではなく、実際に体験したり他者に関わるような経験があると地に足のついた問題意識が芽生えるように思う。

統計法はほかの応用科目とカリキュラムコースを大学院向けと大学院進学しない学生とで分けながら、ある程度指導していく必要があるように思う。t 検定だけでは卒論を書くのは難しいが、心理学統計法では t 検定まで教えるのが限界である。一方で、ほかの応用科目も t 検定を何時間もかけて教えていて重複があるように思える。せめて分散分析や回帰分析を理解していないと卒論の実験や調査のデザインは限られる。大学院進学する予定の学生でこれらを知らないままで、研究法を統合的に理解していないと進学後にかなり苦労するように思う。
この科目に関わることで思いつくことは特にありません。
・受講生の出欠管理の厳格さが求められてきていますが，これをより正確かつシステマチックに実施できる機器を大学が導入すべきと思います。学生個人の出席状況を大学が管理し，GPA や問題行動との関連性を調べられたら，たとえば休学・退学のリスクを早期に検出できるかもしれません。退学者を数人減らすことで生じる学納金のプラス分で，これらの機器の導入を進められるのではないかと思います。 ・大人数を収容できる教室が，現状，400 番教室と宮代ホールしかないのは問題のように思います。100 人から 200 人の学生がゆったりと受講できる教室が，もう少し多くあってもよいように思います。

④ その他、アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）や授業評価全体についての意見・提言など
特に何もないです。ただ、多くの講演者が直接大学に来ることができないので、オンラインコースのままにしてもらえるとありがたいです。
授業内でアンケートに回答するよう指示し、時間も与えたと思っていたが、欠席者を除いても回答率が高くなかったのはなぜかと思った。
回答率が低かった。
丁寧な対応が好評。意欲的な学生からはより詳しい説明(より進んだ学習)を期待する声もあった。
回答結果自体は良好だったが回答者はわずか 2 名(25%)で、アンケートを実施した意味があったか疑問。
結果は良好
(1)アンケートからは、「英語が苦手であったが、授業を通して英語が好きになった／わかるようになった」「楽しかったので苦手意識が薄れた」、という意見が多くあがった。 (2) 一人一人の教員が「授業を楽しめるように工夫をしてくれた」「学ぶ楽しさを届けてくれた」「学生に語りかけるように授業をしてくれた」、そして全体の雰囲気が「明るく、フレンドリーだった」などの意見が多かったことは嬉しいことである。
students seemed satisfied, I would like to get all of my feedback done sooner
受講前に興味・関心があった学生は約 50%だったが、受講後の満足度は 80%に近づいた。工夫の余地は多くあるので、今後検討を重ねたい。約 9 割の受講生から、説明はわかりやく、分量・速度・授業運営は適切と評価を得た。 2 年次必修科目として、英文学に対する興味・関心を喚起し、基礎的知識を与えるという基本的役割は果たすことができたように思う。
アンケートに回答する時間を授業中に用意したにもかかわらず、回答率が 76%に留まった。学生たちにアンケート疲れ？忌避感？が見られる。　率を上げるには何らかの全学的な対策が必要と思われる。

④ その他、アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）や授業評価全体についての意見・提言など
この報告書は、大学所定の授業アンケートではなく、最終回の課題として全受講生に課した「振り返りと自己評価」（記名式）に基づいている。率直に言って、所定のフォームでは受講生にどのような力がついたかを測れないからだ。 設問「この授業（全 14 回）の受講を通じて、あなたはどんなところが変わったか？ 振り返って述べなさい。（※成長の有無やその程度ではなく、振り返る作業を評価します。）」に対する受講生の解答の一部を下に転載する。 1・書かれていることを本の中の世界で終わらせるのではなく、現実世界の問題と結びつけて考えることを通し、答えのない問いを、いくつかの事実を踏まえて自分の言葉でまとめ、根拠のある主張・考えを書くことが出来るようになったと思います。自分とは異なる意見にも触れ、確かにこのような見方もできるなと、一つの考えに捕らわれない見方を持つようになりました。 2・筒井康隆や高橋哲郎の一連の議論を通じて、自分が一方的な視点に偏ることがあると気づきました。例えば、筒井康隆の「断筆宣言」を読んだ時、表現の自由は守られるべきだと強く思いましたが、高橋哲郎の「無人警察」に対する差別的表現の指摘を読んだ際には、その主張にも納得しました。でも、最後まで学び切ってより公平な視点で物事を捉えることの大切さを改めて学びました。 3・この授業の受講を通して、より丁寧に文章を読むようになったと感じている。ディスカッションが主となる授業であったため、題材となる作品への理解があいまいな状態だと人との意見交換がスムーズに進まないことを参加する中で実感した。予習として取り扱う作品に時間を空けて数回目を通し、自分の理解の範囲で要点を整理してからディスカッションに臨むことで、自分の意見を明確に持つだけではなく人の意見に対しても即座に反応し、議論を深められるようになったと感じている。 4・初めはリアクションペーパーにどのような形式で書けば良いのかと言う初歩的なところからよく分からなかったです。ですが、授業で受講生のお手本を紹介していただき、それを参考に自分の考えを資料を参照しながら書く力が身に付いたと実感しています。 5・それぞれの作品や課題に対する自分の意見、考えを明確にするという作業が以前よりもスムーズに行えるようになったと思います。また、グループでの活動の中でも周りの意見を積極的に取り入れて、自分の考えとの違いやなぜ違った考えに至ったのかなども含めて建設的な話し合いができるようになったと感じました。
全学共通のアンケートの他に、最後の授業で全体を振り返る感想を提出させている。この 2 つを授業改善に役立てているので、全学共通のアンケートは現状のままでよい。項目数を増やして学生に負担をかけ、結果的に回答率を下げるようなことはしない方がよい。
総合的な満足度の 86%が 5 だったので、概ねうまくいったのではないかと考えている。
教室の機器によっては、自宅で録画した DVD の再生ができないため、今後新たに DVD プレーヤーを設置する際は SONY ではなく、TOSHIBA（Panasonic?）にしてもらいたい。

④ その他、アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）や授業評価全体についての意見・提言など
儀礼的な年中行事では済ませず、内実を持たせようとするのであれば、そもそも授業に出てこない、アンケートに回答しない類いの学生の意見を聞き出すことから始めなければならない。
Google フォームを用いて匿名で授業内で意見や感想を出してもらうことが効果的であることがわかった。
回答率を挙げる方法を考える必要がある。
少人数の授業で、授業中にアンケートを実施することができなかったため、回答者も少数であったが、最初の２つの質問以外の項目は全て５という評価を得ることができ、「来年もこのままでお願いします」というコメントもあったので、概ね良い結果と言える。全体として出席状況は良かったが、予習・復習の時間数はやや少なめという傾向が見られたので、テキストの訳読以外に別途課題を課してもよいかもしれないと感じた。
授業評価では「受講前からこの授業の内容に関心があった」の回答は「５よくあてはまる」が約２割、「４ある程度あてはまる」が約５割であったが、「総合的にみてこの授業に満足」が「５よくあてはまる」約４割、「４ある程度あてはまる」約 5.5 割であった。ある程度満足しているようである。「授業中に使う教材は学習の役に立った」への回答は「５よくあてはまる」約５割、「ある程度あてはまる」が約４割であった。
・先に述べたように、学生の声を丹念に聞くことに時間を割いたのは、結果的に学生の満足感を高めたようである。「クラスみんなに一言ずつ感想を述べたり、意見を述べる場を下さったため、自分の理解にとても繋がった」「自由的で発言の機会が多い。多様な学生の意見が聞ける」という意見があった。 ・ほか、「授業注意出てくる資料がどれも貴重なもので、先生が実際に現場に行かれたときの様子なども詳しく聞けたので関心がもてた」「授業内容もとても充実していた」「声が聞き取りやすく資料も豊富で良かった」といった、資料への満足感も述べられていた。 ・否定的な意見としては、教室が狭かったことで映像が見えにくかったという点が挙げられた。コンパクトに満席で授業をすることは、教員にはやりやすいかもしれないが、受講生には申し訳ないと思ったので、今後は気を付けたい。
教員の任意ではなく、非常勤の授業も含めて、学科単位で取りまとめる形式に変更するのが望ましい。
非常勤の科目についても、授業担当者の任意ではなく、学科単位で取りまとめて全体像を把握できるようにすることが望ましい
おおむね満足していることがわかりよかった。 ただし、満足している人が回答していると思うので、回収率を上げる工夫が必要だと思う。

④ その他、アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）や授業評価全体についての意見・提言など
おおむね満足していることがわかりよかった。 ただし、満足している人が回答していると思うので、回収率を上げる工夫が必要だと思う。 前期の社会学と全く同じ回答内容になりました。
授業評価はおおむねディスカッションの時間があったことについて触れられていた。ただ自分自身の中で理解をとどめておくのではなく、異なる角度からの理解を知ることを学生たちは求めていることに気が付いた。
自分自身で次回の授業に関連するトピックの情報を収集するように、指導している。だが、提出は求めていないため、ほとんどの学生の事前学習は週３０分～１時間程度という回答結果であった。来年度は事前学習の内容のまとめを提出させるなど工夫したい。
回答者のおおよそ３分２が総合的に授業に満足したと述べており（他の項目も同様）、調査実践⇒データ整理実践まで一通り行うことで、学生たちが質的調査とは何かについて具体的に想像でき、授業の満足度が高まったのではないかと考えている（昨年まではデータ整理法の講義のみでした）。
教員が作成した資料や説明の仕方については肯定的な意見が大半でした。しかし、わずかな自由記述回答の中には、授業内容の難しさとスピードが速いという意見があった。おそらく全体としては問題なく授業についてくることができる学生が多かったと思われるが、若干名は授業についていくのに精一杯だったのかもしれない。今後の授業運営の考慮材料としたい。
当該科目の理解が難しかったのか、逆恨み的に攻撃的なコメントを記入する学生がいる。授業評価アンケートには学生側も記名を義務づけ、自身の発言に責任を持たせるべきである。
当該科目の理解が難しかったのか、逆恨み的に攻撃的なコメントを記入する学生がいる。授業評価アンケートには学生側も記名を義務づけ、自身の発言に責任を持たせるべきである。 （わたしが経験した他大学の授業評価アンケートでは、いずれも誹謗中傷行うことを控えること、問題がある場合は個人を特定できることを明記しています）
従来、学生がファイルやオンラインツールの利用スキルを獲得するため、課題の提出などはあえてSophie を利用していたが、ファイルの作成等に慣れていないためか Classroom の活用を求める意見があった。ディバイスの画面に直接データを入力することが習慣化してきていることもあり、今後の対応を検討していく時期が来ているのかもしれない。
進度が早いという学生と、遅いという学生がいる。履修者全体のレベルを合わせるのが難しい。
話す内容や講義資料の一部が、他の授業と重複するとの指摘があった。各担当科目において、どのようなテーマを扱うか引き続き精選していくが、関連する内容である以上、一定の重複は避けられない（総論的な部分は、むしろ、重複しない方が不自然）ので、その関連性が学生に伝わるような工夫を考えたい。

④ その他、アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）や授業評価全体についての意見・提言など
授業についてもいわゆるタイパ・コスパを意識する学生が増えてきている。授業に対して「積極的ではない」というよりも「手抜き」をして楽に単位を取りたい学生が増えている。
アンケートに答えた学生が想定より少なかった。自由記述の数と肯定的なコメント（ペリアクションーパーへの回答も同様の傾向）と，質的調査の数値との乖離が気になった。上記のような問題が原因である可能性も考えられるので，今後よく観察を続けていきたい。
レジュメ・レポートの作成例を配付したりした結果か、授業内容については高評価だった。個別の意見として「レジュメとレポートの例が提示されており、書式や注釈の入れ方の指定が明確だった」とあった。 授業評価自体については、Google フォームになって学科内でのとりまとめの必要がなくなったのはよかった。共有の方法・範囲もいろいろ可能になったはずなので、利用方法を考えてはどうか。
学生のコメントは、 ・先輩の話を聞く機会があったので、実習に向けての事前準備となりました。 ・面白い話もありつつの授業で面白かったです。 ・事例考察を通して、施設について想像し対応について考えることができたことがよかったです。また、その事例を共有し合うことで新たな視点から考えることができるきっかけがあったのがよかったです。 ・施設職員の方がお話に来てくださる機会もあり、リアルな話を聞くことができた点がよかったです。 ・自分の実習先について調べて発表したことで、より理解が深まりました。 ・よかった点は、施設実習に去年行かれた先輩のお話を聞く機会が講義内に用意されていたため、施設実習について詳しく分かり、安心することができたこと。
評価が改善につながっているのかどうかという検証。評価の必要性の再確認。
授業アンケート結果は、オンラインで確認できるようになっているとありがたい。また、原則すべての授業で実施というかたちでもよい（そのほうが学生に習慣が定着するので）
・回答のための配布、回答、回答結果の回収、データの整理等、電子化したので、全科目でアンケートを実施するとよいと考える。 ・「この授業に不満があるけれど、授業評価がない」という学生からの声を聞くことが少なくない。 ・「重要な質問項目」と「それほど重要とは思わない質問項目」とを学生にたずねる「メタ質問」を一度、実施してもよいかと思われる。質問項目が多く、学生の負担になるため。あるいは、もっと大切な質問項目を加えるために既存の質問項目を精選するため。

④ その他、アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）や授業評価全体についての意見・提言など
教材会社がオンラインで無償提供しているソフトを活用して授業を進めた。課題を家庭に持ち帰って遂行することが可能である反面、それによって遅刻、欠席率が上がったのではないかという懸念がある。「総合的に見た授業への満足度」は満足（5 段階の 5 と 4 ）が 100%であったことから、音楽づくりの新しい経験に受講生が満足してくれたものと考える。「初めてやることばかりだったが適切な助言を得られた」とのコメントが満足度を代表すると考える。
アンケートの Q4「総合的にみて、この授業に満足した」に関しては、5「よくあてはまる」が 87%、4「ある程度あてはまる」が 13%、であった。自由記述欄には、例えば、「学生の私語に対する注意が、しっかりされていたので、講義に集中して参加することができ、とても良かったです」という声や、「リアクションペーパーについての内容を取り上げる時間を比較的多く設けてくださり、毎回フィードバックがもらえるよう、時間をかけて丁寧に取り組むモチベーションにもなりました。また、授業資料がわかりやすいことに加え、授業の最後に必ず映像資料を用いてまとめとなるような構成であったことで、1 回の授業の定着度が他の授業に比べ、高かったと感じています」という声などがあった。他方で、今後の課題としては「いつもマスクをしているせいか、声が聞き取りにくい時がある」という声もあったので、今後は注意したい。
授業途中で、私語や内職の注意をしたことに肯定的なコメントがあった。残念なことがであるが、これからも続ける必要がありそうである。もちろん授業をもっと魅力的なものにして、そのようなことがなくなる努力が必要ではあるが。
専任教員の授業評価については、科目を選んで行うのではなく、授業ポートフォリオのように、複数科目について回答できるようにしてはどうか。
宮代ホールの空調については、授業中も学生の様子を見てこまめに変更するなどしていたが、とても快適だったというコメントと、改善してほしいというコメントがあった。座席にもよるのだろうが、難しいと感じている。
このアンケートでは、授業改善を目標にしているのだとしたら、ここの授業について何を改善すべきかを反省する機会にしたほうが良いのではないかと思いました。
回収率が低すぎて驚きました。これでは意味がないと思いました。
うまくいった授業の工夫などを，簡単に披露してもらうイベントを FD などで企画してはいかがでしょうか。このアンケートを集約した部局から数名の教員に依頼し，上手くいった例，いかなかった例を披露し討論する，というイベントは需要がある気がします。
アンケートを参考に、高等教育機関としての大学の学びの在り方について考えていきたいと思います。
授業開始前に事前アンケートを行い、履修生のニーズを把握するようにしている。当初の予定を変更したり、情報・知識を加えたりなど、授業づくりの参考になっている。

第３章　学科・専攻による授業報告書

学生による授業評価の結果をフィードバック後、各教員は自身の授業を振り返り、その成果や課題等を「授業報告書」として提出するが、これらを学科レベルで取りまとめ、学科・専攻コースの授業報告を作成する。以降は各学科の報告である。

2024 年度　学科・専攻コースの授業報告

学科・専攻コース名　英語文化コミュニケーション学科

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

概ね達成できている。（達成できた・ある程度達成できた のどちらかの回答であった）

2. 目的達成上効果的だった方法や工夫

パワーポイント、ハンドアウトなど配布資料、文献などの資料、教科書などの教材、視聴覚教材、プレゼンテーション、グループディスカッション、ゲストスピーカーの招聘、授業内での課題、厳格な出欠席

3. 教室設備の問題

・教室の整備。試験の日に教室の変更をしてわかったが、２号館に出入口が後ろ１か所にしかない教室があり、防災上の問題があるのではないか。
・341 番教室　「映像配信」のボタンを押すと、同時間帯に別の教室で行われている授業の音声と映像が映る。
・342 番教室　後期後半にプロジェクターの故障により、投影画像が強い黄色で映し出されるようになってしまい、スライド内の画像の色の判別ができない状態が続いた。修理が必要とのことだったが、対応は各研究室ではなく総務課でできるようにして頂けると有難い。
・342 番教室　ワイヤレスピンマイクの本体のホルダーがなくなってしまっている。

4. 授業内容、運用カリキュラム編成など意見

1）教員個人の取り組み：

・積極的でない学生もいるので、教員が積極的に働きかける必要があることがある。
・遅刻や欠席の増加に対し、より毅然とした態度での対応が必要。
・分からないこと、困ったことがあるときにそのサインを教師や周りの学生に表示するように促す。
・欠席・遅刻が多い学生にどう対応するかが大変悩ましいが、辛抱強く見守れば期待通りでなくてもそれなりに前向きの姿勢を示してくれることは分かった。

・説明を時々区切って、個別の作業状況を見て回ることが非常に重要。
・英語で実施される講義も複数回あったが、難しい用語を簡単な表現で言い換えるなど工夫をすることで、学生が理解することができたようである。学生からは「英語だけの授業についていけるか心配だったが、理解できる工夫をしてもらえた」とのコメントが複数見られた。
・大人数の講義科目であり、私語に対する注意は課題として残った。とくに後方の座席の学生達に対して私語をもっと注意してほしいという要望があった。
・オムニバス形式で、毎週課題を提出する授業であった。しかし、授業に出席したにもかかわらず課題未提出という学生が各回一定数いた。課題の形式や提出方法の統一、課題への取り組み方に対する指示の明確化など、来年度は少し工夫をしたい。
・少人数授業のため、ディスカッションを多く取り入れたことは学生の取り組み促進だけでなく、クラスの雰囲気の良好化にも繋がり、学生にも好評だった。Google Classroom を利用したディスカッションクエスチョンへの意見収集は、トピックへの理解度や応用力を図るだけでなく、学生にとっては論証の練習にもなった。 また、ミニフィールドワークとして図書館に行き、オンライン以外の図書館リソースを使ったことは、その後の図書館利用促進にも繋がったようである。
・continuity between grades and feedback

2)学生の積極的取り組みを促すための効果的方法、工夫

・少人数授業に限らず、大人数授業であっても、学生をグループに分けて話し合う時間をもうけることで、一方的な講義ではなく、インタラクティブにすることができる。
・パワーポイントを使用する場合でも、それを印刷して配布するのが学生に評判が良い。Google Classroom に課題を提出させた場合、大人数では難しいができるだけ個々にコメントを返す。
・学生の志向性や能力がまちまちなので、個別に丁寧に対応すること。
・意欲や能力の差が激しいので、プランに縛られず毎回柔軟に課題を設定すること。よくわかっている学生にほかの学生の指導補助的な役割をしてもらうこと。
・Moodle のオンライン教室で毎回の個別達成度の表と、学習事項のまとめを掲示。毎回の作業と学習事項について英語で日記を書いてもらう。
・大教室での 200 名近い受講者のいる授業であったが、グループワークやペアワークを積極的に取り入れた教員が多く、学生からも「周りと意見交換できたことが楽しかった」「理解が深まった」と高評価であった。
・講義の中で、クイズや視聴覚教材(YouTube, 映画)などを取り入れることで、講義内容により興味を持たせることができた。
・1)学生がプレゼンテーションの中でディスカッションクエスチョンを提示する、２.)それを Google Classroom の「質問」を通してクラス全員に課題として意見を提出させる、３)プレゼンテーションを行った学生が、翌週に意見の要約と特に印象に残ったものなどを発表し、追加の意見を募る、4)講師が個々へのフィードバック（Google Classroom)と全体への講評

（授業）を行う、というサイクルを実施したところ、アクティブラーニングの日常化だけでなく、内容の理解やトピックへの関心度の向上に繋がった。
・early and consistent communication between the teacher and the student
・授業の本題に入る前に、当日の講義のキーコンセプト・キーワードに関わる Warm-up Quiz を出し、その場で収集した回答を共有し簡単なフィードバックを行った。学生は、近くの学生と意見交換をした後、Google フォームに回答を提出。（Warm-up Quiz をしない回と比較して明らかな違いが見られた）。回答の収集に意外に時間はかかったが、学生の理解度を把握して授業を進めることができた。

3)学科や大学全体として取り組むべきことについて

・基本的な生活習慣や学習習慣が身についていない学生が一定数いる。授業への出席や課題の期限内の提出が大切なことなど、一つの授業だけでなく、学科・大学が共通のメッセージとして伝える必要がある。
・英語の学習に苦労する学生の声を聞く一方で、英文科の English Tutor や、MCAL の語学アドバイザーなど、相談できる時間や場所があるにもかかわらず、利用が非常に少ない。広報の問題であるのか、あるいは自ら行動することが難しいのか、学内の各学科や部署で情報交換をする機会をもうけるべきである。
・自動翻訳や生成 AI の利用についてのガイドラインの作成が必要である。
・コンピュータの作業を一緒にしていく場合、個別対応は教員一人では対応に限界があるので、指導補助者が付くのが理想。
・本学には 100 人以上収容する教室が非常に少なく、大人数講義では詰め込まれすぎになり学生にとって快適でない。今は試験の時に一人おきに座らせることができず、学生からも不満の声があがっている。
・意欲や能力の格差。
・毎年必ず 1 年生のほうが 2 年生よりも達成度が高いのはどうしたことか。学科のイメージダウンになるのではといつも心配になる。
・英語文化コミュニケーション学科は「英語だけ」を勉強する学科であるという誤ったイメージが広がっている。学科で学べる内容の広さ（メディア、文学、英語教育など）について、1 年生に知ってもらうことができたという意味では、授業の目的がある程度達成できた。
・多国籍社員のいる会社に勤める本学卒業生から「授業中に意見を述べるだけではなく、お互いの意見をぶつけて議論する機会をもつことが重要」とのアドバイスがあった。ディプロマポリシーとも合致しており、授業の中でこうした機会を取り入れられると良い。

4）その他

・丁寧な対応が好評。意欲的な学生からはより詳しい説明(より進んだ学習)を期待する声もあった。
・アンケートからは、「英語が苦手であったが、授業を通して英語が好きになった／わかるようになった」「楽しかったので苦手意識が薄れた」、という意見が多くあがった。

・ 一人一人の教員が「授業を楽しめるように工夫をしてくれた」「学ぶ楽しさを届けてくれた」「学生に語りかけるように授業をしてくれた」、そして全体の雰囲気が「明るく、フレンドリーだった」などの意見が多かったことは嬉しいことである。
・ more support for students who are struggling and how we are going to create the new curriculum

５．授業評価に関する感想、要望

・回答した学生が少ない
・students seemed satisfied, I would like to get all of my feedback done sooner

2024 年度　学科・専攻コースの授業報告

学科・専攻コース名　日本語日本文学科

1．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

・すべての授業で目標を「達成できた」または「ある程度達成できた」。個別には、授業アンケートで総合的な満足度の 86%が 5 だったので、おおむねうまくいったと考えているという意見があった。

・全体的に予習復習に時間をかける学生が増えた。これには教員の課題の出し方が大きく影響していると考えられる。

・教員個人が実施したアンケートの設問「この授業（全 14 回）の受講を通じて、あなたはどんなところが変わったか？　振り返って述べなさい」に対して「自分の理解の範囲で要点を整理してからディスカッションに臨むことで、自分の意見を明確に持つだけではなく人の意見に対しても即座に反応し、議論を深められるようになった」「(リアクションペーパーの）受講生のお手本を紹介していただき、それを参考に自分の考えを資料を参照しながら書く力が身に付いた」などの回答があった。

・一方で、試験に臨むに際して明らかに準備不足の学生や、学修意欲の低い学生も目に付いた。そのような学生をどのように授業に引き込むかは今後の課題である。

2．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など
（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

・「専任教員授業報告書」の Q2 に挙がっている授業方法や工夫の項目のほとんどを実施した。ただし、7. ロールプレイング、20. 授業の時間帯、21. シラバスの工夫、を選択したものはなかった。

・授業目的を明確にし、それを初回で受講生に明示した。その後の回でも、修得すべき学力が今後の学業や卒業後の生活にどうつながるかを訴え続けた。

・授業で必要な参考文献をあらかじめ本学図書館に注文して揃えておいた。

・授業時に公平で明確な指示を出し、学生からの質問に真摯に対応した。学生が十分に活動できないことの一因に、教員の指示の不明確さがある可能性がある。

・毎回の授業を聞いていないと最終評価で高評価が得られないことを初回に説明し、その緊張感を維持するよう努めた。受講態度に影響し大事なことだと思う。

・グループディスカッションは反応がよかったが、教員が話す時間が短くなるというデメリットもあった。

・講義科目において。話題が一段落したところで受講生同士で確認し合わせた。1 人でふり返るより正確に授業内容が理解でき、ディスカッションにも発展したのでよかったという感想が多数あった。

・演習科目において。興味深いトピックを選び、わかりやすく実演した。テーマの選択権を受講生に与え、自分で体験して研究のきっかけをつかませることに留意した。

・演習の質疑応答を授業時だけでなく、GoogleClassroom の質問機能を利用して終了後 1 週間以内にやりとりする方式を採用した。明らかに議論が深まり、受講生からはじっくり考えて記入でき、他の受講生の意見を広く知れるという感想があった。
・授業時間を前半と後半に分けて 5 分間の小休憩を入れた。受講生からは後半も集中力が続き授業が受けやすかったという感想が多数あった。
・学期中に小レポートを 6 回提出させた。その都度、評点・採点基準・優秀解答例をフィードバックし、どのように書けばよりよいレポートになるのかグループワークで考えさせた。その結果、小レポートの水準が向上し、最後の 2 回では 85~90%の解答が A 評価、残りも B 評価までに伸びた。
・「文学と社会を結びつけて考察する」「受講生の視野を広げる」を授業目的とする講義で、以下のことを徹底した。

①目標に適した教材選び
②受講生に実践させるワークやディスカッションの設定
③ ②の前提として受講生に提供すべき情報の用意
④受講生の能力向上に資するフィードバック（小レポート等における）
⑤毎回の授業運営計画

3．今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

・2 年目になる「日本語日本文学入門」は昨年よりスムーズに運営できたが、さらに効率的な運営方法を検討する。
・教学面で問題のある学生の情報を学科内で共有する。
・学科内 FD 研修を継続的に行う。本学科は教育方法や学生指導について学科会議の中で頻繁に取り上げる体制ができている。

4．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

・FD 情報の共有を積極的にはかる。きめ細かなフィードバックは教員の負担が大きいが、GoogleClassroom の提出課題に対するコメント機能を利用して評点をフィードバックすると省力化できた。ICT ツールを利用したより便利な方法があれば共有してほしい。
・今年も教室設備について改善を求める意見があった。

①203 番教室：昨年に続き、2 つあるワイヤレスマイクがどちらも充電切れで使えないことが多かった。有線マイクもあるが、机間移動をする授業では不便である。
②220 番教室：テレビ型プロジェクターの接続がうまくいかず時間のかかることがあった。授業アンケートで学生にも指摘された。

5．授業評価に関する感想、要望

・アンケート回答の時間を授業中に設けたにもかかわらず、回答率が 76%に留まった。学生たちにアンケート疲れ？　忌避感？　が見られる。回答率を上げるには何らかの全学的な対策が必要と思われる。

・本授業報告書は、全学共通のアンケートの他に、教員個人が行ったアンケートの結果も踏まえている。2 つのアンケートを補完させて授業改善に役立てているので、全学共通のアンケートは現行の形式のままでよい。項目を増やして学生の負担を大きくし、結果的に回答率がさらに下がることは避けるべきである。

2024 年度　学科・専攻コースの授業報告

学科・専攻コース名　　史学

１．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

授業中に SNS などを行う学生が一定いる。講義形式の授業ではなかなか抑制することは難しい。注意してやめる学生は最初からやらない、その逆はその逆なので、永遠に終わらないモグラたたきになる可能性が高い。

２．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など
（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

リアクションペーパーで寄せられた質問などについては、授業内で応答することで学生の学習意欲が高まる傾向にあると思われる。

３．今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

生成 AI の日進月歩の発達に対して、いかに対応するかは重い課題として今後も継続的に付き合っていかなければならないと思われる（生成 AI の利用が講義の性質上、無意味であることの啓蒙、生成 AI を無力化させるような課題の賦課など）。

４．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

AV 機材の性能や使い勝手が教室ごとに大きく異なるので、そこの平準化をお願いしたい。

５．授業評価に関する感想、要望

そもそも授業に出てこなくなっている学生の意見を集めることが大切なのではないか。

2024 年度　学科・専攻コースの授業報告

学科・専攻コース名　　人間関係学科

１．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

2023 年度入学生（2024 年度 2 年次生）から新カリキュラムに移行しているが、骨子がシンプルでわかりやすくなり、おおむね授業の目標は達成できている。

一方、カリキュラム改訂前から共通する傾向として、統計学に関する授業においては学生の理解が二極化しがちで、授業担当者にも苦労が多い。授業中に電卓を用いて手計算をさせる、1 クラスあたりの人数を制限して個別に対応するなど、できるだけの工夫をしているが、有効な解決策は見つかっていない。

２．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など
（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

講義形式の授業においては、学生同士のディスカッションや情報共有が理解を促進するようである。口頭で直接のやりとりだけでなく、対面授業においても Google フォームや meet のチャットなどの ICT を活用するとよい。

３．今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

全員が卒論で社会調査を実施することが学科の主軸であり、方法論（統計学を含む）の理解は必須の課題であるが、前述のように、統計の授業は学生の理解が二極化する傾向が強く、下位層の学生の指導に苦労している。「社会統計学」「社会調査の技法」と、2 年次の「共通演習」を連動させて理解を促進するよう、複数授業間の調整を試みている。学生からは、複数授業の連動で多少なりとも統計学の理解が促進されたという声があり、今後もよりよい方法を探っていきたい。

また、教員間でも互いの授業に参加する、学科内でデータ処理の講習会を開くなど、スキルアップに努めている。

４．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

一部の教室では、照明に問題がある、教室を真っ暗にしなければスクリーンが見えないなどの不具合が報告されている。

５．授業評価に関する感想、要望

学科内で授業評価を実施する授業を事前打ち合わせていたが、一部の授業では実施しそびれている。授業評価の性質上、最終授業（試験の前週）に実施するのが望ましいが、そのタイミングでは、試験の準備や、予定外に授業中の課題が長引くなど、必ずしも授業中に授業評価の時間をとれるとは限らず、ここで実施できなければ、もう機会がない。

回収率の低さも課題である。授業中に実施しても、教室から退出して回答しない学生もいる上に、授業外の作業とすると回収率が極端に下がり、授業評価としての信頼性が担保できない。匿

名のまま、回答の有無だけをチェックできるようなシステムがあるとよい。たとえば、授業評価を送った後のフィードバック（「回答を記録しました」）に別のフォームの URL を掲示して、そちらで学籍番号や氏名だけを収集するなど。（他大学では、授業評価に回答していなければ自分の成績を閲覧できないなどのシステムを採用しているところがある。）

また、非常勤の担当科目については、学科で管理することが困難である。

2024 年度　学科・専攻コースの授業報告

学科・専攻コース名　国際交流学科

１．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

おおむね授業の目標は達成できた様子である。少なくとも学生に対する授業アンケートや、専任教員の授業報告書で判断する限り、例年と比べて、学生の取り組みについて大きな変化は見られない。だがいわゆるタイパ・コスパを意識する学生が増えてきている。授業に対して「積極的ではない」というよりも「手抜き」をして楽に単位を取りたい学生の増加が見られる。またとりわけ 4 年生の卒業論文執筆指導が年々困難になっていく印象がある。

２．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

・授業の冒頭で、小課題に取り組んでもらい、講義内容への興味を引き出す。
・板書を充実させる。そのことによって、履修者の授業の取り組みが真剣になる。
・紙の辞書を引かせる時間を取る。なんでもデジタルで済む時代であるからこそ、基本的な学習態度を習得させる必要がある。
・教材の工夫：学生の理解度に合わせて、学生にとって身近で具体的な題材・トピックを積極的に用いる必要が（年々)高まっている。
・考えさせるための工夫：授業の課題やリアクションペーパーを生成 AI に聞いてそのまま書く学生が急激に増えているため、問いの立て方や、思考のプロセスを主体的にたどらせる工夫が必要になっている。
・１年生向けの授業においては、学科の２年生の取り組みを見たり、グループワークで直接話を聞いたりすることが有益であった。
・教員が学生１人ひとりを理解し，教員から適切なアドバイスがもらえることを学生は切望している。見守られていることを伝えることで、１人ひとりの自己肯定感と学びへのモチベーションが上がり、成長が加速するようである。まだ授業は完成ではないがそれでも，学生がひとつひとつの課題に取り組む中で非常に多くのことを学んでいることが日々のリアクションペーパーから分かり，最終課題のテーマ選定で示した問題意識や取り組みの内容が、1 年前の水準とは比べものにならない成長を示していたことに驚いた。

３．今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

・ワークショップ形式の授業は「適正な学生数」というものがある。下限は不要だが、人数の上限は設けるべきではないだろうか。 自分の担当する科目は国際交流学科、なかんずく異文化コミュニケーションコースの学生にとって最大の教育効果をもたらすように設計されて設置されている科目であるにもかかわらず、他学科の学生で、もしかすると「単に時間割上の都合」や「アルバイトの都合」で、この曜日・時間帯に「なんでもいいから単位を取りに来ている」だけの受講生がいる可能性を排除できない。この場合、「ワークショップ形式」

（グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション）を機能不全にさせるような人数に「目的意識の低い、単位を取るためだけに来ている学生」で膨らんでしまうことは、主体的に当該学科を選び、高い問題意識を持ってこの科目を受講しようとしていた当該学科の学生に不利益をもたらす結果となってしまう。 ワークショップ形式の授業など、人数の多さと教育効果が反比例してしまうような科目は、学科や学年といった判断基準で人数制限をかけられるようにすべきではないだろうか。

・課題の締め切りから発表までの期間などスケジュール管理の問題や，教員がグループ研究を見守っているだけではなく，もっと内容に踏み込んだ意見を出すなどして関与することへの学生の希望が，最終授業での聞き取りで判明した。学生の自主独立に少々期待しすぎたようだ。学生からの改善希望も明快であったので改善したい。

・グローバル社会コースは，2年生教育は専門課程の基礎となる大切なものと位置づけ,「自分計画」などコース独自の工夫に加え，国際交流学科が目指す DP を実現するため、修正を加えながらカリキュラムの改善を続けていきたい。

4．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

とにかく機材を改善してほしい。具体的には以下の通り

・多くの教室でマイクが 100 分授業に十分な充電ができないところが多いので、新しくしてほしい。

・205 教室　DVD プレイヤー（B-ray?）に問題があった。教卓のシステムが古く、プロジェクターの鮮明度も良くはない。

・古い AV 卓（設備）の更新、特にプロジェクターやスクリーン周りの機材、スイッチ位置をアップデートする必要がある。教室を暗くしてプロジェクター（スクリーン投影）を使用するのは現代的ではない。

・403 教室　床が壊れていて、学生や教員が転びそうになる。

・1 号館 4 階の教室はどれも、大学の学習環境とはとうてい思えない。

5．授業評価に関する感想、要望

・話す内容や講義資料の一部が、他の授業と重複するとの指摘があった。各担当科目において、どのようなテーマを扱うか引き続き精選していくが、関連する内容である以上、一定の重複は避けられない（総論的な部分は、むしろ、重複しない方が不自然）ので、その関連性が学生に伝わるような工夫を考えたい。

・アンケートに答えた学生が想定より少なかった。自由記述の数と肯定的なコメント（ペリアクションーパーへの回答も同様の傾向）と，質的調査の数値との乖離が気になった。上記のような問題が原因である可能性も考えられるので，今後よく観察を続けていきたい。

・進度が早いという学生と、遅いという学生がいる。履修者全体のレベルを合わせるのが難しい。

2024 年度　学科・専攻コースの授業報告

学科・専攻コース名　　哲学科

１．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

今年度、前後期の授業においては、どの授業においても授業目標は十分に達成されたと考えられる（全授業において、１「達成できた」あるいは２「ある程度達成できた」の評価)。学生の取り組みに関しては、授業報告書に該当する調査項目がないので、明らかではない。

２．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など
（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

それぞれに授業の形式や目標によって必要な方法を用いているが、他の教員にもヒントになるようなものはない。ただし、近年の AI によるレポート作成などに対応して、筆記試験を実施したという例はある。

３．今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

全学的にも学生の能力や意欲に格差が広がっていることに対して、必要な底上げだけでなく、上位層を伸ばす工夫も必要であると考えている。

４．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

AI によるレポートやリアクションペーパーの作成に対する明確なガイドラインを作成する必要があると考える。

５．授業評価に関する感想、要望

特にない。

2024 年度　学科・専攻コースの授業報告

学科・専攻コース名　　教育学科

１．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

全教員が「達成できた」「ある程度達成できた」と回答し、学生の一所懸命な学習への取り組みを高く評価している。

２．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

グループワークやグループディスカッション等のアクティブラーニング、ゲストスピーカーや近隣の学校園との連携・訪問等の体験型学習等の実践事例が多い。そして、それらを支援するICT ツールや学内システムの有効活用の例が多く見られる。

具体的には、次のような例が報告された。

・質疑応答の時間や、グループディスカッション、発表を通して、他の学生の事例考察をシェアし、実習に対する課題や不安を自分のこととして捉え、深い理解が進むように働きかけた。また、他の学生の見解を理解することで、様々な視点を考えられるように促した。
・デジタルではなく、逆にアナログ的な作業。手で書いたり、声を出したりすること。
・知識構成型ジグソー法によるグループワーク、講義、グループ単位での調査活動、ウォームアップ＆振り返りの個人課題などの組み合わせ
・「成績」「ペナルティ」「叱責・注意」で学生をコントロールする方法ではない方法。
・おもしろい授業、対話型授業、問題に基づいた学習（PBL）、学んだ内容を実践する機会の提供、自身の成長を感じられる機会の提供など。
・作品を途中経過、完成品の複数の時点で共有、相互評価することで、創作の刺激になった。
・座席をランダムに指定することで、新たな出会いをうむ
・レポートやリアクションペーパーなど、学生が提出したものに対して必ずコメントをする。回答があると、学生の書くことへの意欲につながる。
・体験的な活動や学生自身が調べ、考え発表する活動は有効であると思われる。
　・今回、近隣の保育園の子どもと触れ合いながら遊びの重要性を学ぶ機会を 2 回導入し、とても大きな学習効果と学生の意欲を高めることができた。「体験」と「理論」を結びつけるような授業方法が必要だと思われる。
・各自の生活に応用できる内容であったことの評価が高い。映像教材（特にビデオ教材）を途中に入れる点についても評価が高い。
・随時学生同士の意見交換やグループワークを取り入れることは効果的だが、そればかりでは疲れてしまい知識の定着にはつながらないようだ。

3．今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

以下のような意見が報告された。

・カリキュラムの柔軟性。シラバスの柔軟性。

・各学年の到達目標の「具体像」の明確化と共有

・学生が受けてよかったと思う授業の工夫をしたい

4．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

・視聴覚教材が教室の機材と合わずに映像が見られないケースがあり、対応に苦慮したので、様々なデータに対応できると有難く存じます。同じ形式のデータでも映らないケースが御座いました。

・「成績」「ペナルティ」「叱責・注意」で学生をコントロールする方法のデメリットの周知徹底（特に学生が「選択」する余地の少ない全学必修科目において）。

・コピペ（剽窃）や生成 AI の丸ごとコピー等への対策。「不正行為」の幅の拡張、生成 AI 使用ガイドラインの作成、不正行為へのルールの明確化、厳罰化（「規則」は厳しく、「運用」は柔軟に・優しく）。

・教室設備の面で言うと、本講義は人数が多い講義だったので「教室が窮屈だった」という声があった。また、「机が高くて授業が受けにくい」という声もあった。

・授業後半（デジタルでの音楽づくり）は学習支援センターの機器を使っての授業展開であったが、将来的には音楽室でもこれができるような設備があることが望ましい。教科教育の観点からも、学校現場の ICT 活用に大学の設備が全く追いついていない現状がある。

・受講生が多く、出席をフォームでとるのだが、出席していないのに出席にフォームを提出している人がいるという学生からの指摘があった。他の教室や学寮にいる者へ出席している者が連絡しているようであり、モラルの徹底は必要かと思う。また、wifi の調子が悪い日があったりして出席の提出がぎりぎりになってしまったりしたという指摘があった。

・講義式の授業で、教室の後ろの方にばかり着席して内職をしたり、授業中にスマホに出るために出入りすることや、ゲストスピーカーがいる前で平気で机の上につっぷして眠るようなことはマナー違反であることを、１年生のうちから教えてあげる必要がある。

5．授業評価に関する感想、要望

・授業アンケート結果は、オンラインで確認できるようになっているとありがたい。また、原則すべての授業で実施というかたちでもよい（そのほうが学生に習慣が定着するので）

・回答のための配布、回答、回答結果の回収、データの整理等、電子化したので、全科目でアンケートを実施するとよいと考える。

・「この授業に不満があるけれど、授業評価がない」という学生からの声を聞くことが少なくない。
・「重要な質問項目」と「それほど重要とは思わない質問項目」とを学生にたずねる「メタ質問」を一度、実施してもよいかと思われる。質問項目が多く、学生の負担になるため。あるいは、もっと大切な質問項目を加えるために既存の質問項目を精選するため。
・専任教員の授業評価については、科目を選んで行うのではなく、授業ポートフォリオのように、複数科目について回答できるようにしてはどうか。

2024 年度　学科・専攻コースの授業報告

学科・専攻コース名　　心理学科

１．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

報告書が提出された全ての科目において，目標達成度は「達成できた」「ある程度達成できた」であった。

２．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

学科の専任教員より以下のような事例や提案が寄せられた。

- 前日までに授業内容の資料を Google Classroom で配付したことは好評であった。映像資料を用いるなどの工夫をしたが，対面であっても 100 分間の講義に集中することは難しい学生もいるようで，途中に 5 分程度の休み時間を設けられたら良いのではと思った。
- 授業内容に関連して，外部講師を呼んだミニワークショップを行った。また，学外の美術館など社会教育施設を訪問するような取り組みも行った。実際に授業内容にかかわる体験をすると，学びへの動機づけが高まる。また，外部講師を呼ぶと学校の外の社会に対する意識が高まり，社会に出た後も想定した自分の人生の目標を探そうとする傾向があると思う。
- 必修科目においては，できるだけ必修科目間の教室や開講時間帯を合わせるのが学生にとって重要だと思った。昨年は教室や時間が離れたことによってかなり学生の意欲に影響したように思われた。統計法は講義のみでも進行できるが，アクティブラーニングの手法を取り入れたり，プレゼンさせることは効果的だと実感した。計算への苦手意識はあっても，統計法自体への抵抗感はこうした教育方法で軽減されるように思う。ペアシェアやジグソー法，グループ分けしてその中で発表させ合うことはどの講義でも手軽に取り入れることができるし，学生も能動的に学ぶことができる。
- 学生と教員，学生同士の良好な関係づくり，計画通りの進行，動機づけやコミットメントを高めるために「自分ごと」として考えられるような問いの設定。事例についてのディスカッションとロールプレイング。
- ゼミでグループディスカッションをしているが，学生の発言が活発になるように，どのようなやり方をするかということを次年度に向けて工夫する必要がある。
- 教員自身のプレゼンテーション技術の向上が重要であると感じます。スライドの見やすさなどはもちろん，喋り方や，Slido（https://www.slido.com/）を利用した投票，質問募集などのギミックの用い方など，工夫できるところはまだたくさんあると感じています。また，受講生から，Google Classroom で授業前日に配布される資料をもっと早く見られるようにしてほしいという要望をいただきました。授業時間外の資料配布やフィードバックも含め，14 週の授業全体のより精緻なデザインが必要と思います。Slido はかなり効果的であり，匿名で質問を募集できる，あるいは意見投票ができる，など，受講生を飽きさせない工夫ができました。スマートフォンを片手に授業を受けることを止めさせることはほぼ不可能ですの

で，それを逆手にとって，各自のスマートフォンで授業に参加させることが，受講生の意欲の向上につながっていたと思います。

3．今後，学科・専攻コースとして取り組むべき課題

学科の専任教員より以下のような意見が寄せられた。

- 学科では教員の専門分野を一つの入り口として，各分野を深く知ることが重要だと思う。その際に，いきなり論文を読むだけではなく，実際に体験したり他者に関わるような経験があると地に足のついた問題意識が芽生えるように思う。
- 統計法はほかの応用科目とカリキュラムコースを大学院向けと大学院進学しない学生とで分けながら，ある程度指導していく必要があるように思う。t検定だけでは卒論を書くのは難しいが，心理学統計法では t検定まで教えるのが限界である。一方で，ほかの応用科目も t検定を何時間もかけて教えていて重複があるように思える。せめて分散分析や回帰分析を理解していないと卒論の実験や調査のデザインは限られる。大学院進学する予定の学生でこれらを知らないままで，研究法を統合的に理解していないと進学後にかなり苦労するように思う。
- 心理学科の教育は，人（や他の動物）を対象として実験・調査・観察を行い，そのデータの分析・考察に基づいて卒業論文を執筆することを最終目標に，文理を横断した学識や科学的素養，及び倫理的態度を身に付けさせることを目標としている。それと並行して，専門資格（公認心理師の国家資格）の取得を可能にするカリキュラムを破綻なく運営することも重要な使命である。これらの両立を持続させるために必要な専任教員を適切に配することが課題である。

4．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見，提言など）

学科の専任教員より以下のような意見が寄せられた。

- 宮代ホールの空調については，授業中も学生の様子を見てこまめに変更するなどしていたが，とても快適だったというコメントと，改善してほしいというコメントがあった。座席にもよるのだろうが，難しいと感じている。
- 受講生の出欠管理の厳格さが求められてきていますが，これをより正確かつシステマチックに実施できる機器を大学が導入すべきと思います。学生個人の出席状況を大学が管理し，GPA や問題行動との関連性を調べられたら，たとえば休学・退学のリスクを早期に検出できるかもしれません。退学者を数人減らすことで生じる学納金のプラス分で，これらの機器の導入を進められるのではないかと思います。
- 大人数を収容できる教室が，現状，400 番教室と宮代ホールしかないのは問題のように思います。100 人から 200 人の学生がゆったりと受講できる教室が，もう少し多くあってもよいように思います。

5．授業評価に関する感想，要望

学科の専任教員より以下のような感想や要望が寄せられた。

- このアンケートでは，授業改善を目標にしているのだとしたら，個々の授業について何を改善すべきかを反省する機会にしたほうが良いのではないかと思いました。
- 回収率が低すぎて驚きました。これでは意味がないと思いました。
- うまくいった授業の工夫などを，簡単に披露してもらうイベントを FD などで企画してはいかがでしょうか。このアンケートを集約した部局から数名の教員に依頼し，上手くいった例，いかなかった例を披露し討論する，というイベントは需要がある気がします。

第４章　グッドティーチャー賞の推薦

本年度は他と比べ顕著に評価が高かった教員が特定できず、グッドティーチャー賞は該当者なしとした。

参考資料

2024 年度 〇期「授業に関する調査」（選択方式）

授業内容・方法、教室・設備等について、授業を履修した皆さんの意見を広くお聞きし、その結果を授業改善に生かすことを目的に、「授業に関する調査」を全学的に実施いたします。この調査結果は、「授業報告書」という形式にまとめられ、学生の皆さんにも公開されます。また、大学全体の授業や設備改善のための資料としても活用されます。書いた内容によって皆さんの成績評価が影響を受けることは一切ありませんので、率直な意見、提言をお寄せください。前期の調査は、下記の要領で実施されます。ご協力をお願いいたします。

対象科目：〇期開講科目　　※授業担当者が 1 科目を選定
実施時期：〇月〇日（〇）～〇月〇日（〇）〇期授業終了日まで
実施方法：Sophie 全学掲示に実施について掲載していますが、実際の実施については
授業担当者から授業時間内もしくは Sophie「担当者からのお知らせ」などで
指示があります。その指示に従い、回答してください。
回答は無記名で、時間は 10 分～15 分程度です。
※授業名・授業担当者をシラバスの通り正確に記載してください。

聖心女子大学　副学長（評価・広報担当）菅原 健介
教務課管理棟事務室

※以下、アカウントが表示されていますが、回答については個人が特定されることは一切ありません。回答にご協力お願いいたします。

二重回答した際のチェックのため、次の質問にお答えください。この回答は集計には用いず、授業評価の終了期間後、すぐに削除します。

・あなたの誕生月を入力してください。例：4 月〇日　⇒4　　10 月〇日 10
・あなたの携帯番号の下一桁を入力してください。　例：090-〇〇〇〇-〇〇〇1　⇒ 1
⇒4 月の誕生月の方は 41、　10 月の誕生月の方は 101 と入力してください。
数字を入力してください。

授業科目の入力について
授業科目名は必ず入力してください。その際、シラバス記載の授業科目名をクラス（数字もしくはアルファベット）まで必ず入れてください。
例）キリスト教学Ｉ－1（1）、1 年中国語文法（1）A or（2）A、2 年英語 Reading1B、日本文化研究 1 など
授業名を入力してください。*

授業担当者の入力について

参考資料

授業科目名でデータの仕分けができない場合、授業担当者で仕分けをすることになりますので、こちらも必ず入力してください。
授業担当者を入力してください。*

授業の開講日と時限について
語学など複数曜日、時限開講の場合は週の早い曜日と時限を選択してください。
　例：火曜日 1 時限と木曜日 2 時限の授業の場合･･･火曜日と 1 時限を選択してください。
集中講義などの場合は、授業の開講日はその他を選択、時限はその他を選択し集中と入力してください。
授業の開講日を選択してください。（ラジオボタンで選択）
時限を選択してください。
1 時限
2 時限
3 時限
4 時限
5 時限
その他:

あなたの所属学科・専攻をお知らせください。
※1 年次生は基礎課程を選択してください。（ラジオボタンで選択）
基礎課程
英語文化コミュニケーション
日本語日本文学
史学
人間関係
国際交流
哲学
教育学
初等教育学
心理学
その他:

学年を選択してください。　（ラジオボタンで選択）
1 年次生
2 年次生
3 年次生
4 年次生
大学院生

参考資料

その他:

Q1. この授業への出席率はどのくらいでしたか。
すべて出席した
1 度か 2 度欠席したがほとんど出席した
3 分の 2 程度出席した
3 分の 1 程度出席した
ほとんど出席しなかった

Q2. この授業のために平均何時間程度予習・復習しましたか。
週 2 時間以上
週 1 時間〜2 時間
週 30 分〜1 時間
週 30 分以下
週 0 分

Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。
よくあてはまる
ある程度あてはまる
どちらともいえない
あまりあてはまらない
まったくあてはまらない

Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。
よくあてはまる
ある程度あてはまる
どちらともいえない
あまりあてはまらない
まったくあてはまらない

Q5. シラバスの記載内容は、この授業を受講する上で役立った。
よくあてはまる
ある程度あてはまる
どちらともいえない
あまりあてはまらない
まったくあてはまらない

Q6.　教員の説明の仕方、話し仕方はわかりやすかった。

参考資料

よくあてはまる
ある程度あてはまる
どちらともいえない
あまりあてはまらない
まったくあてはまらない

Q7. 授業中に使う教材（テキスト・配付資料・映像）などは学習の役に立った。
よくあてはまる
ある程度あてはまる
どちらともいえない
あまりあてはまらない
まったくあてはまらない

Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。
よくあてはまる
ある程度あてはまる
どちらともいえない
あまりあてはまらない
まったくあてはまらない

Q9. 教員の授業運営（質問などの発言の十分な機会、私語の注意など）は適正かつ公正だった。
よくあてはまる
ある程度あてはまる
どちらともいえない
あまりあてはまらない
まったくあてはまらない

Q10. この授業の良かった点、あるいは改善すべき点は何ですか。また、設備や教室、通信環境などに関して何か意見や感想がありますか。この授業の改善につながるような建設的な意見を書いてください。

ご協力ありがとうございました。

参考資料

2024年度 専任教員授業報告書（〇〇学科）

本報告は本年度のご自身の授業を振り返っていただくと同時に、個々の先生方のご経験やご意見を全学的に役立たせるための資料として使わせていただきたいと思います。学生の授業評価の集計結果とともに整理して掲載させていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

所属学科を選択してください。（プルダウンで選択）

氏名（役職）

授業科目名

授業形式　（ラジオボタンで選択）

1. ゼミ・演習

2. 講義

その他:

Q1. 本授業では目標をどの程度達成できたと思いますか。　（ラジオボタンで選択）

1. 達成できた

2. ある程度達成できた

3. あまり達成できなかった

4. 達成できなかった

Q2. 目標を達成する上で効果的だった方法や工夫はどのようなものですか。　（複数回答可）

1. パワーポイント

2. レジュメなどの配付資料

3. 文献などの資料・史料

参考資料

4. 教科書・問題集などの教材

5. 視聴覚教材

6. プレゼンテーション

7. ロールプレイング

8. グループディスカッション

9. ディベート

10. グループワーク

11. ゲストスピーカーの招聘

12. ICT ツールの活用

13. 学内システム（Sophie、Google ドライブ等）

14. 教室（座席変更のできる教室・演習室等）

15. 予復習の課題

16. 授業内での課題

17. 私語への注意、対応

18. 小テスト

19. 厳格な出欠席

20. 授業の時間帯

21. シラバスの工夫

その他:

Q3. 教室設備（空調・ICT 機器・マイク等）や通信環境に問題はありましたか。

1. 特に問題はなかった⇒Q4 へ

2. 問題があった⇒問題があった教室もしくはオンライン環境についてお聞かせくださいへ

参考資料

問題があった教室もしくはオンライン環境についてお聞かせください。

例）205 番教室　プロジェクタの色や鮮明度に問題があった。

オンライン　Wi-Fi がつながらない。つながりにくい。　　など

Q4. 授業内容、運用、カリキュラム編成などについて、特にご意見、ご提言がありましたら自由に記述してください。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について（ご自身のことでなくても結構です）

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

③ 学科や大学全体として取り組むべきことについて

④ アンケート結果について（結果について・学生のコメントなど）

⑤ 「授業に関する調査」ついての意見、提言など

⑥ その他

ありがとうございました。

聖心女子大学

2025.8.31